菫葉袖草紙 乙

へ 5
1259
2

京都府立図書館

芭蕉袖草紙 下

浪速 花屋庵音湍技

元禄七年 [illegible]

[illegible]

大は孫のそれとも〜えいけい仏

猿蓑

[illegible]

柳葉菜すゝこの穂はとろ〜汁　芭蕉

笠あたらしき紙をあけぼの　乙刀

雲雀鳴小田よりぬぶるや　珠碩

志ゝとさ行くて下されにけり　素男

行隅よ出遠うゝえて言ふ分　刀

勝峯晋風文庫

二階の客いかく生たる秋　蕉
放やる鶏の行ハえも芭蕉　男
稲の葉のひの力ふ江風　碩
鶏ゝのうゝめに載る鉢巻　蕉
内蕊江ゝと　ゆ江ゝたれ　孤
和の刻の箕の　ゆ江ゝ西方　碩
ゝ江る扣の　ゆ江ゝ男
萩の札ゝ江の札を添ふて　孤
雀ゝより百舌一声　智月
情よ江球あゝむろ秋の月　九兆
汐ゝゝゝぬ舟の海ゝ　孤
陰の柄よゝゝ　去来
灰ゝ江ゝ江ゝ茶の源　兆
芸の日よ仕舞て帰る往机　正秀

庇なもの養ゝ供のよ智ゝ　来
汗ぬゝ江ゝ鶏の走ゝの併の糸　半殘
ゝゝ江せゝ江ゝ雑の下　士芳
天膳よ思ひくつを改ゝをして　殘
身いめ生紙のゝ　芳
小刀の蛤ふふる網立ゝと　殘
柳よ火ゝゝ大年の松　園風
ゝゝゝゝい思ゝ江ゝ浦　猿雖
胸ゝちあい世ゝ　殘
世夏もゝ江ゝ破江ゝ　風
碧油ゝゝ世ゝ　雖
喫声の傳ハちゝ江ゝ　芳
添ゝいゝゝ日ゝゝゝ　風
取ゝき後ゝふゝ　嵐蘭

降雪にうゑる井の刈下駄　史邦
花よりとりわけて寒らん　野水
雛の扶弦そむるとしる風　羽紅

山里は万歳おそしうめの花
こうこうのおろ雨や二葉の苔の前
芙風よこうとふ能の賀の声　萩子
ふぜとかきおとされしまゝ
　重潰
山吹や宇治の焙炉の匂ひ時
　屋敷は惜まれ
引茶は迎の人とそ
子紅大竹原をもる月
うれ茶をさいしかせよ
　下ノ三

落柿舎　二句
柚の花よむ句は料理の方
五月雨やそ笠へけうる碁の跡

猿蓑

市中は物のふほひや夏の月　九兆
あつししとけしの門しめ　芭蕉
二書州とも家さん穂に出て　去来
灰うちたくうるめ三枚　兆
世筋は根もえ寺は不自由さよ　蕉
たゝとひやしに出る服指　来
草むしふ蛙とはうる夕雲　兆
蕉の茅ゝよ行燈の清　蕉
反人のおくはは花のほのむ時　来

能登の七尾の冬い住うれ　北
奥は青志ゐるまでの花とんて　蕉
まけ人入しゝ小郡門の篠　来
えこうり屏風をたふす女子哉　北
湯屋い井の簀の子僧しれ　蕉
茴香の実ゑ紙を房とりあ　来
僧や寒く寺よ泊るら　北
猿蓑のさると宗祇の方　蕉
年に一斗の地ゐるるる　来
五六年生木はけうる水海り　北
足袋ふまよこ仮屋ほつれ　蕉
遣たてまよ紀郡馬の刀　来
洞市う行人あるしうら　北
戸隠ゐもむしろかこひの麦屋哉　蕉

てんじゆ山ゆきいつゝを付　来
こそしと草鞋ゑ仮るゐ枝さ　北
蛍ゑ紙ふるひよ紀しし　秋　蕉
その中に洗ひ流うゑ外ふと　来
少うて盃の合ぬま　捷　北
草庵よ志ゝく居ていあ破う　蕉
いのち蛙し紀撰集の法法　来
ゑ海しよ品紀ゐるゑ紙て　北
う紀ゑのてていあ小町く　蕉
付白ゑ粥ゑるふも浸ゑ　来
郡沼ちとふ山れい度き板茂　北
まけひしふ風迄ゑ花の傍　蕉
蕉動う炊屋のねひゑ　来
刀奈美山

去来

蒙られ紙こけ出て瓜の異ふ
世拙よ蟬の吟そろてゑ　浪化
歩り蔦はよふの人を咲せ　芭蕉
かとは供のろとさろて　之道
半時ほと夜の虫なる月入　太州
火のもちくしと燃てやゝ寒　支考
軒に舊迄のほる番請芋　惟然
見者もろ見をあうむる　野童
切り立て畑えろた丹波山　野明
そろし出をそれうり初　来
寒ゝ合ハ線の元巻ぬ沈斗り　通
ぬくう嫁けし切り焼のそや　州
ちくしと力見苦表ゝみこ成そ　考
そそくしと世よく秀のたふ　然

砂川の浦く流るゝ月秋　童
表志とれも粧ふ明
百ほろ人花の本隠れ名残　道
業疲おほろよ西城に晴に　来
此寺小撈厳よりしこそ　草
狐場の云事れむつのまろ　考
朝の内ひとこに馬城迄せや　然
解ほさあけて汁粉ゝ等　童
羽ふ板の寄て一宮にあ　明
僧上ふ人て妻ふ沢ぬる　道
案小設よ絡の十徳のそ　来
ふ私ふ行さと秋ハ未に　草
此夕ア方城世よ取山よ　考
志ゝ行ふ畠の吟ふかつく　然

雨降れば井の戸りのうしと　童
うち出まうる市の小屋掛け　明
はこころの化粧屋とうりて　道
聲と罵のかかる　扶持　考
町屋の郷下りしてい洞くみ　州
塗と箱ちうあの出一入　蕉
花の香のきりくやなめえうら　然
日ふ一日きのとへはう　明

俳諧集

なてうをうにはまて
きまう家ふ弦絃を
ひくしとあらう屋やをれ除　芭蕉
青柳はちはく名の　諸　安世
隙弦為に糸弦名ゆよこ送て　支考
それをて家弦造る原中　窓

月の紙をめくれ拘る柔て考　土龍
大うと出のふ弦をうくふく　丹埜
傘弦をはめて戻るうの紀の蓋　芽
出ううふるく人の玄　伴　蕉
きけてうと扶ふ弦きうへ連れ　世
扶うはるやしきむ海　除　考
いとすに仏弦付るふまして　野
きの向の風ふ紙を吹ふく　芽
ようう把るむをとの居る線上　蕉
ちうくに戸の美引付まう　路通
ふ一うてひとひくふれ思を
ちつとの事ふ校帝うはく
月花弦紀の文よかーとう
おうれくうしや描きうり　野

石塔弐丈よりて今朝芽出し
背丈ケ伸たる伸きゝかな
古久の人形仲宵うゑて芽前
芝端出してうゐ苔うる
猶帯ふ殘をとゝ見て穴うゝ
名深の町の辻付もるる
明月の旅よりてたる実東畠稲　葉文
ことゝはいうゝ浸るあらむ
菅薯いちつゝと待る秋哥
いつ絶りても待ハ上るあ
女房よりそ矣れ必之惜て
風もれ武士の二番くも
土手節の茶時よりやる富士垢離　野

坂の居ぬをるもれてふ爰の方
酒しゐとタ名残身て呑る
病ぬいて往白まるる花蓙
とちゝへ向くもそいとんろ
俳諧集　及肩
秋立て丁凡うゝ雨乳乳
茂居ふゝえて戸残ろと力　珠碩
早稲茶茶残をう仕共用もふ　之道
人ちて考る辻の殺下作　正秀
腰掛もさひゝくえる田舎接
をうつゝれゝ出ろの風　探志
奄捉て船のこけらを持て人　碩
ちんゝ沈の髪もたゝ　す　道
居ちゝふ雑炊時の中る花　房

雷おちる娘こうあゆれ　秀
かけて金〳〵合羽の柔たる止に　道
肌をゝと博奕ゝ　ゑゝる　碩
力の糸酒よせいし紀近うえ　秀
茶筑蔚なりと寺の雇人　志
上弦よ窮ぬをむ臼のうけ　房
日和よむ紀一　茶の朝明　肩
どりしと掠板ぬゝ花豊　碩
茶のひつれたるまゝの川草　道
幅度よ砂川ゝゝる雷さよ　志
羽織そろゆる講ゝる　肩
行ゝゝと朝起ゝ五六日　道
茶筑休む淦　の味　芭蕉
毋親の仕立てゝゝる嫁入り衣　秀

ゑよさ一出る風おかふし　房
江戸后とおてゝ左右の門つま　碩
麦筑茨ろ香よ咽のうきし　道
脇引の方筑君にせられて　志
青の小函に若竹生出る　肩
志んしと風の伊る屋号尼　秀
ゝろ筑告る秋のひよる　肩
山畠の木行ゝゝ色つく見の青　蕉
石地の坂とゝつゝるや坊　碩
性法を亀井の大工彫して　道
かゝ紀と筑を京良の潛上　肩
野の度さ年し花を挿ひろ　秀
かゝしゝゝる茶のあけぼの　碩

蠅ふらしへとやとりの秋の日敬れ　素来

葛のうら吸　性子の　皷　芭蕉

小灯をさいぬぬ萩よかけ　路通

狗して来うる奥の　孫　丈竹

一通りえられる墨ろ　朝月よ　惟然

ゆくゆくとゆくと脊中おそる　来

寄あけて云ハまぬ人と思ひよ　蕉

よ水はうひよる出る面うけ　通

あ月しのとつれかりて老れ　草

云そろへたる芝のふされ　然

夕月言させる為して立のう　来

泥うちうれ果て五女のされ　蕉

石佛いつれ欠ぬふりうう　通

牛ぬ背まて牛他らもや　草

酒の酒かそ上ケ不醉ふせう　然

宮の八島ほたつ〇蓬ひて　来

陸奥ハ花ちうの方のさ酒しふ　蕉

竪の玉仙をうこちの雪　通

解ぬの友をはしかる玉れ雨　草

我小力よ志むひる巻　菓　然

ぬ中ハ進そと宮に駆出て　来

疲しそとろ沈の安さよ　蕉

行先ハく拾ひ沈果の古竹履　通

あを他人と雪よ帰　草

供ちうくハまとしも空れ静　然

烟の中よ蔵る　稲　ほよ　来

人ハまと井よ無退ぬ多月叔　蕉

拉ろ鑿のええぬ雪けさ　通

やはらけふる雨にぬれ教へそめ　草
庵の面にふるぬ　侍　然
る蜆しろ〳〵ゆて通りけり　来
けうの中よりをそや捕　蕉
代浦も汗倒井りをそろひ　通
舎芭ほとく蕎笠のう〳〵　草
佛よいかるこの花城奉る　然
業城はむ裝の白机暖　来

星合集

牛部屋より坂の京ふし秋の風　芭蕉
下摺の上より蒲萄たかはる　路通
酒志ほる京ふるに月ふれて　史邦
扇巴みか出ふるけきり　丈草
ふれ井に手をしるるこみ家　去来

下九

蓮のまこと葉の毎かるに　野童
笠拭もまこと涼しくをつれて　正秀
扨りの楽城おむ芋とさ　蕉
休る日も瘧ふるひの教よく　通
涼くむ臭の憐いふせお　邦
ぶま干なる裏打紙張見　草
いつも病うの萩の下枝　来
秋立てよ一きうふる汁　童
蕎緑なるく僧堂の　有　秀
ふ分れ城ふる筆れれ　蕉
病よはくもて浮世さうれ　通
裝るこをにふられぬ死の色　邦
畑ふまるく去て若しを　華
人仏座俵の囲いさえう　来

産月までもうろき　仔　童
う紀幸城辻井よ伺ろ陸も　秀
絢　買　客のこつる衣し　蕉
硝子よ減り陸えもろ茉酒　通
橋　咲いむうしー法ふし　邦
叢よ泉ふうもろり卵僧　草
明石の楫の太鼓寺出次　童
大うこいロー宮ふる紅ろし　秀
ちうこに似せめ碟こひふ紀　通
ゆるされて女の牛け青沢う　蕉
教くられぬ志のひ法の力　通
匂い水きくろふて初嵐　邦
まさも鼬のこうひら逃ひ出を　草
ひて抜ーあえ入いそかーさ　朱
下十

油あけをぬ庭ふやせたり　童
篤の花よい庭とろうて　秀
柳を風のたをけてそ吹　独筆

庭右紹人の紐をふこれれ
もら芝くそろれ
色のいへい唇宮ー秋の風
いふつくさくく人の言さよ

猿蓑

灰汁捕の手やくくなりを　九兆
あうくかそうて青森そふ秋　芭蕉
新巻おあしたる方新よ　野水
なくくく旅しー十のさうつ紀　去来
千代竹つきあ城ふる青して　蕉

うくひすの青よゝかなるこゑ　兆
雪の出て肌よあらる春の初　来
屋敷のうら根よりたれる水　水
夕飯よかまとの煙へ風業雲　兆
蛙の口をへをとられて手味噌　蕉
あ思ひ〳〵人はうとれて休む日よ　水
疋せん〳〵れ殿りのねゝ　来
金鶏と人よ呼ぶ子れやとさ　蕉
ゝの風呂好きの青しの有　兆
町内の秋もふけ行やゝ　来
行とえるまゝ寒さうゝ　水
花ともろ〳〵ハ西ゝ寒ゝ　蕉
木菅の雨蓋小ぶも言て　兆
うゝ中らゝ佐〳〵人に十かゝ　水

紫さとゝ赤の株とかゝける　来
ゝ〳〵の荒小ゝなる　兆
旅の詩ゝよ有明〳〵おく　蕉
をさまき女の智恵もそう　来
ふよふもひ竹根のおく　水
中人方松ゝ根の庭潮ゝ　蕉
人もこゝれ〳〵なゝゝの水　兆
ゝそたゝに自腹ゝて松ゝ　水
すゝも大事の新とゝ等　来
悟ゝゝ因れ青ゝれていさ　兆
加茂の社ハよゝ〳〵ゝ　蕉
あゝゝの屋ゝゝゝ名ゝて　来
雨のゝゝゝの安ゝ迅速　水
屋行ゝ青路れ身のゝとさよ　蕉

きりぎしの水よ蘭のそらん　北枝
糸桜腹一ぱいに咲にけり　来
芝ハ之月曜のそら　水
夕顔歌

古寺秋月　芭蕉

月ゑとろ庭よりうゝ紅葉ちる
庭の梯の蓼ゝの虫とふれ　尚白
犬捕ぬる窓の影(イニの影か)ゝ
別南院の古松　枝　詩　柔　蕉
尾張のめてたうゝ侍小剱
百家しめうゝ川の水　上　白
寂寞と系る人ふき茅沙堂
雨の墨ゝ夏坂寂させぬ　蕉
一むしゝふるゝて結る市の芝　白

這うるゝの飯つゝむゝ　蕉
いそゝうしとはうしかなる油門　白
孤ふと踏きてゝ引られ絶て　蕉
月の茶おさへて志ひろ小屋(イニの)　白
拾捜うゝゝ枝ばうゝの虫　蕉
信茨ゝ髪ハ芝ゝ秋くれて　白
大立の損ばいのゝ迷宮　蕉
三石(イニ)の撥楽やゝふくれゝ　白
八つ下ゝゝ芝の古ふ俳　蕉
雁ゝ一ゝ白根よやもぬひゝて
うゝ系ゝ馬にをくむ孫巻　白
商人の擬にさしたる弾拝　蕉
ゝゝ志やゝゝ志ゝ志の教　白
蒜の香れゝゝもつれぬ島を　蕉

墨さるよりる水色月の蛙屋　白
鋼の声つくしたる丟園番　蕉
宮宝きる多空もまれ　白
蓼茨に夏の葉の紫勾の風そて　蕉
きいふん細北小の三日月　白
たくさの塩よのはれ一雲　蕉
さても明るる時秀の郷　白
西北の空の時の夕雪雲　蕉
小草ちらし蛙い遥かろう　白
霧雪の中うて晴るる月ときそ　ハ
氷張えて捨る宵の茶　蕉
宮内て蕉と入る彩のまれ　ハ
打うけ垣ないろしの蝶　白

十六夜集

中とし出てひさよ小月蛙　邑蕉
糸代ちらしてそもそもそれた　成秀
ひちちきて咲も捨いぬ萩の系れ　路通
鍋ととけたる音の世ちしれ　文草
ちろしと腰ぬいる蛙ぬ碎　惟然
蛙ちろ上をクそのこの　格脇
我ものよ訓る鄙のくれ　正則
石の花表の出付城よ　楚江
鴉鶴の森を見ちけて綾ひり　勝重
衾はちろ一日ハ時雨ちり　葦香
拍子木ものの笠ふ傍の折られて　鬼苓
流れ血たりる谷の大竹　正秀
月新よれ一重る白の上　則
たくちしとちしこの　重氏

湖こだ絶ゆる秋なれ折うらん　重五
賢のゑ〻数を今数へ付たり　蕉
年〻しの花ゆふら〻〻あれ数　草
花〻しる車もせぬ去の月　則
蓍の葉の下い芥子吹落し　睡
さ〻やく事のもろ〻〻ふし　正幸
ふけさ行くゑゑ去くゆたをとして　江
いてゝの心よ流へて来る　水苓
汗臭を人いかあ〻〻を立る　奇
さめてゑ〻も焼養敢さん　然
風止て流る〻中〻れ〻〻ゑ　秀
只一〻はしたのむ涙もの　通
はりしい古花都の荒のゝ　柴菜
月えをあてゆ中〻て根立　草

秋風よ細の岩ゆ〻ゑの竜　苓
栗ひる猪の夕アア淋〻を　腸
片倫ふるみハ行ゑれ拾し　通
分細きをつの反ゝとゝよ　重成
長掘よ銀土器銭ゆ〻ゝ花　柳流
ほ〻〻ゑ明て拾ハ明ふ〻ゝ　成
職人の示ゆ〻いせる花の法　強正
南ゆもてよゆ〻くむ若竹　青
俳諧集　探志
市明の清て教室中磨むし　正秀
月さ〻ゆ〻る夜のゝね去　昌房
橋の今四ハ業と為ゆ〻人　盤子
よ拭帝の〻めゆ力ゆ花　芭蕉
廣浦の今屋と人よ亡させて

すまことにしたる奥の焼やう　及肩
窮屈ゑ題　製はうゑ帝　墨江
書紙をこの　長　赤ゑの　紙　志
ひたぐるひ侍賀　紙　秀
扶寄の集　紙　編かりうり　蕉
出来合のあふるまんみ　子
小ゑ　ゑ　蕎麦　垣　房
名月小倩りてゑふひ　歌　秀
新酒の酿のほうしてゑ　江
酒る事ゑ　ゑれい　ほ　蕉
ものふるふとゑ　志
咲花のゑれゑ　肩
筆　せる　ゑ　房
酒るすおのう　ゑ　秀

用ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　子
見る斗り　細　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　江
湖水紙　呑て　胸　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　蕉
張家ハ　扇　静　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　房
条のた　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　秀
むさゑと　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　志
名紙紙　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　吟松
みちけゑや　勅　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　子
ゑゑゑた　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　秀
お紙ゑ男　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　房
たゑゑた　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　蕉
一振の実　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　秀
淳紙中の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　子
風筋ゑ行　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　肩

馬よ乗りても徒歩さけて　江
誰う花をさ〳〵土付る花はな　房
海うゝえ〳〵てのとろゐる〳〵去　蕉

三井寺の門たゝくやうゝ　
茅ゝゝ衣紙とゝしの有はな
役所にて用さし入る法御堂

曲翠亭

乳麺のゝたきゝる教子ゝ

九月九日乙州ゝ一杯なり

きゝまゝるゝ

草の戸や日ゝられてゝれさ乳酒

藁の家

路通

うるハしゝ稲の穂ふみ乱れ
雁もとゝふ水に沼の水　昌房
白壁の内よう船すめて　色薫
蝋燭の火城もろ〳〵有　正秀
たのゝれて銀杏の葉ふち敷す　野径
をゝうゝて乳牧志ゐ為れとろ　乙州
関寺に寄かゝゝる懸鼓　畫好
月い沓雲と為りて悲しし　珠碩
あゝ陶つ紀まゝと秋ゝい宮ゝ　盤子
金堀よ入る河のとほ〳〵大　里東
田の中よいろゐも稲の打重ひ　探志
芝居の札の采集めゝる　滝刀
御嶽ゝう雲ゝも不自由に旅の道　秀
拔宮ゝふ志むる帯の後ひ　通

汐氣よ二階の新畳つき上げて　好
蕎麦の白ひのむせる下積　東
かけうどや流れ紅の蓼うし　刀
東風吹く白る家　水の影　子
花よ雪の粉おろし粉ふる雨　秀
豆腐上げにあけて客待　碩
うつみある炭程就語りて須忘　州
置れと捨てもとの姿見　通
うどやうふ出ても吸ふ蓮根　蕉
汐のさしく赤る月の廊　香
暮の蟲思ふ坊主行の乾　子
くれおのうち就吸ふ長屋　州
ちと矣もやさいたん小路　碩
ちくさ出た蓼の会月　蕉

下七

ほとゝぎすを寺寮に居就組て　好
秋のゆくのひる筆の篠　往
書ハ中ハ三史文選くつ出　通
庭孫おしやる豆ふくて孫　刀
おさへたる嵐就終よ立ち　房
蓼蔵踊こむ居風呂の漏　子
内程ゆ月とゆ立ゆを蓼蕎　碩
蕊の出入旅やう秋声　往

後猿集

蓼就ほれて　針巌

淋ぬほとゝぎすハ時ものよ雨蛍根
火とうつるよ冬れうくひた　如行
一年の仕事ハ麦におさゆて　芭蕉
垣ゆ入舟をさし出をあり　荆口

うちつれて弓射る岩有明の　文鳥
山〻〻霧をさけるる小坊主　此筋
秋風や鴉なけ波を長いろり　左柳
冬の上を岩鼠てふむ　如風
恼悩の飢ひ破りたる蓑笠縁　行一
会佛の声れ細う雪ゆる　残香
別れんと冷き小袖あためて　千川
雅ささちの恵のひとふき　義
奥住居留ち付表い戸紙ぬ　に
茶番さしてあ冥にし　嶺
鞍おろを馬ハ丸雪をけ搔ハ　筋
作る方の波て出こ〻る　鳥
〻り志の糸ふも菴仰せて　義
貝利て芸を送るく〻り　柳

下之六

葛は糸のおもてえせうけ鉢
千川子
おく〻に伊吹ぬ冬ぬ
俳諧集
白雲その二人の子に拙を拙後を
名をあるべく
それ白ひ拙より白し水仙花　芭蕉
土中ワ〻中のあ〻ぬ〻を雪　白雪
朝〻〻角あ〻を雪の　桃隣
ちやう蛙ふの吸てとる　芦雁
洗濯のいと侍をとろふ青竹　支考
蛙鼠ふ〻〻たり〻に乳　以文
蕨ふハ〻〻ひ集め絃を押　扇車
仏風や〻〻鼠声て中る　淡水

別路の出てんさ石ふ猛うくる　桃先
殺いとちめら作ふふ出と　桃後
水仮とよ月こそ見れ庭を行て　桃鯉
ミやこのさともそらぬあよ　雪丸
花ゑて紀あきき坊主の紅ひ　雪
顔やふれたる白ゑの方　蕉
秘の追ふまてゆるられあり　水
家をうう春てりふも接之　考
芸るふたをとれ化粧の和をけ　之
二方の鏡のとりつけもない　先
たもしろ紀霞の中れとけやね　雁
小網と鯉のとれるいせうと　隣
黒砂の浜もかをれ吸つれて　後
雨よるふらふを西の法ふし　丸

下ノ十九

鯉
松葉の撰よ者る鍋　蓋　鶴
雑子笛城首よをたる物の供
雪降ることてりふも吸　滝　隣
ふこしと生死温泉の夢ゑて　考
院も志ゝ繋城俺ひ法ひうり　後
やりとうに鶴吸ぬ紀の方　丸
浜ケの孫ハトよておさそ　蕉
あの赤いとやうう鉄酒を浜ゝ　之
馬繋る門の井　垣　雁
二丁あの延ゝ吸ゝる一しゝ　先
新のまゝうてて紀小　蛇　雪
咲く花よ那ふ井さら成拾　車
村城ささんて肥るう　松　水

風未寺より素堂に
教是一口いのち出る藤かな
嵐雪
霜うりて名残名のする時雨
三秋残て草庵よかれい
門人もかりかりていふと
芭蕉
ともかくもあれて雨の折尾花
戎蕉孤雲より湾を垂ふり
夷係家野も暮ゆくうり　利合
元禄五年
雲若菜

芭蕉

晨霧よりくらく八雲ふるふ
吹あげらるる実の雲これ　嵐雪
帰る鴨ふるる沢鴨も澤立て
七曜山伐出こうふ法記　蕉
町伐り栗の集たる砂畑
嵐〳〵も窟く溜る馬の血　雪
坊主も老ともいと腰遣て　蕉
土の餅はく神幸おそろ
生餅は燃はくもふる雨と紛　雪
日暮て秋ろ拙う切うけ　蕉
黒白ふ法ふき飯をつけて　雪
おろ〳〵に新鉢よこた眼　若　蕉
舌根の念佛は渡る居士衣　雪
小塚い稲の中ふ法刈立　蕉

扶てうゑ庭泉の岩上をし　雪
いさうふひんや焼物の角　蕉
蕣る花を酒根岐雲つ氣石　雪
かけうゑ童女和の下　蕉
分のうさも分子叶ふ徒を素　雪
和泉のかつら桶の名岐とる　蕉
紫燭のふる紀都ハ荒さう、
よさも淺さう推て黒石　雪
年寿の志のひてを世る秋の風　蕉
髮をる育紙力をひうめく　雪
長門より西の劉の根岡して　蕉
鞘を玉をハいと貪ふらん　雪
山茶花の後ハ水仙梅つる　蕉
雪を鞠玉くゝ貫う馬　雪

下ノ巻

有りせん大江の岸ハ切石　蕉
削て居ゝした帖箱のさ　雪
所謀叛もまつ個ハ金ぬ沈　蕉
孫宜こ徒を神も居ぬく　雪
花器と勉もたの岐思ふらん　蕉
催こいしと田舞ひてるる　雪
赤人も今一日の酒樓嬢　珍碩
かゝけ嗅をを衆の振辺　蕉

百指

雪や餅を糞を塚の先　芭蕉
日も高を夏のあたくろ　支考
やふ入ハ於蕣八とんせかけて、
なくさをなうゝ筆もつゝ　蕉

ひろ鳥方おしと呼てみる、
風も吹こぬふ笹の葉れつゆ　考
哥の舎源こうろ時肌寒を、
蘆ゑの宵ふる　侍　蕉
ふるしと音をうおとすれを、
瓦こう寄を思ふ徒願成　就、
二三年たつのふ変れそことく　考
贄紙をやしてて送る旅、
充実ふハけ焼附るれの方　蕉
機をる絡ハ角力元の事、
何ふの田へけりやうこの明元　考
表明ヶの星のすることをうある、
即供ま常陸の助も花ろろ　蕉
白い作くしにおの紙入り、

下略

かけうふの金子例にもえたろ　考
ま紙とをつて人の名ば向、
本稿こう出れいおのしかしとろ　蕉
金城弱しして銭をはく　蕉、
松風のとんしと吹ま通　考
拾まうあろと若る門　蕉
湯ハ水のやうにふるふる泉桶　考
馬を疋ま留ま城あつこうろ、
小調市の時うみたる奉公人　蕉
福うふくれハ女房ろうもハ、
むとにに涼しハ方の今うう　考
あの板こうし牧ろうらこの建、
二の丸の光りかやく金扉風　蕉
雨もたこうて本の朝ち、

さらしと紫陽の仮装食迫　考

松上りて迫と　美　堂

民部の花も咲り江戸ゑんし

与居城と云て伸る背竹

猫の恋やむとさと国の鶏　有

起きしてう友ふせんぬるゆ條

鎌倉を生て出りんゆこと

五月雨や鮫ろうく素のこと

晋の淵明ゆ琴ゆ　ゆむ

ゑ石形よ豆葉の美やたゆ　ろ

美堂の毋七年今りとり　九月

七日は芽すゝ　最万ゑ七程

七夕の萩のまやゆ一の秋

七夕堂

星の秋よ花火ゆく後　待　其角

りてたとや星の一枝もあさりも　素堂

深川集

深川夜遊　芭蕉

青くてもあるべきもの秋涼　洒堂

抱てゆもたき秋の初嵐　嵐蘭

腎の方掬のゆ滴行うせて　岱水

坊主らしらのもえたるく　堂

松山の腰ゆ行しの咲めうう　蕉

焼炉の煙をくすす川　蕉

いとひ日の行うべうるゆ小豆粥　水

ふを内掴んて洗ゆ油ゑ　蘭

掛えに魚のうろ拭せてゆ　蕉

変篇ようてるゆ加茂ゆ　堂

寒徹を山雀籠の中ら　了　蘭
正氣なむ風のかるさ　水
月のうらはすめ子ハ仕てきて　堂
きもるとうに絶おさもる　蕉
階さうへ落花の雪ぬ降方夜　水
粕谷の町山の麦遅き空　蘭
弓はしめをうるとうるこの息た　蕉
落ゑりま馬上の海へ乗い　堂
町中の名石ハ赤くきうて　蘭
吹も去うに秋ハ静なる　水
草足袋に地雪結宇紀秋の名　堂
ふしうあうの古ま屋の月　蕉
玉水の早苗ときけハふうりや　水
我係うも知敏寺まる　蘭

下平四

山伏を切ってかけたる実ぬ　蕉
獲もたねいるからぬ世の中　堂
附合ハ長抜上戸を呑あり　蘭
そうもしとあうを陸あり　水
のうれて和尚ハ孔よ歩ひる　堂
たてこめてあう道の大日　蕉
撰あけて水田も言る人の声　水
遥行ゑよ絲桜ひ　蘭
不防ゑう地鯉鮒の乾魚市　蕉
出城うへ巴ひ土間の竈　堂
茶み升人うムたらえ　蘭
雑ゑのはうにとうムゑ　水
三日方よ地ハ秋しそハけ花

名月や門よさしこむ浮ごゝろ
十壱夕の小粒になるぬ秋の風　許六

深川集

前栽や水田のうへのいなむしろ　洒堂
雲こゆる降日よ代うへる雁　嵐竹
長くして蘇いる馬の寒うて　芭蕉
糞叶けふる道のさうさめ　北鯤
古戦場有も志りけるをみ渡り　嵐蘭
去ちこえ過る我宿の笠堂
さゝ波の門の柱よ寄て　竹
雲を吹ぬいて入る虹　蕉
巻葉よ扉休まるかゝしの鯤
水仙ひらる房朔の作よ　蘭

十六夜集

秋草や中ゝ日数経ぬ秋の路　色蕉
青ゝとそゝきにこもる谷川　岱水
野ふかう居村の弱地宝りて　史邦
さゝまの月よ盃の蓋　半落
塩附て餐ゝ往の叶　枕　嵐蘭
ふてこいゝ草の引ゝる　蕉
草ゝ土持ゆるをゆゝし　岱
飯坂の湯よ浴ゝ汗　史
矢筈の業成ゝ亜石の上　半
やさしくゝ咲る撫しこ　嵐
ひっ折のふゝんよ寒ゝ丸く寝て　蕉
抱出中よ浴ゝ　岱
月雲れて雨の降ゝ止む星の降り　史

早稲の俵よりはやくかり立　嵐
狗虫にやとく乾さるく秋の風　岱
番よ赤子成内をる小坊主　史
花ちのあとゝえたる土ふれ下　半
細き井溝成のはる若菰　蕉
芸風よ大ユ中る田る稼芝居　嵐
のゝにおらを伊丹もろ白　岱
流球よ祝命ゝの表ゝ　蕉
是成この除いあらん物　役　史
ゝ初ゝまて近付ゆ[illegible]本ゝ成ゝ土　半
嫁入をゝよゝ[illegible]や明ゝ引　蕉
油ぬらに深ゝひゝの盆ゝて　嵐
月もゝひゝを碧油の糟　岱
門赤を百ゝゝの門うゝ　半

云幸よ屋たゝる京良成坊方　蕉
傘とひろけもあゝを俄あめ　史
ゝる月も異しゝ牛の月霞　嵐
出居ゝとゝも陰居成出ら成　半
于物つき中ゝる精進の朝　岱
よ拭のまれて夫ゝ云つゝ　蕉
駐茶ゝゝこゝむ板敷成上　嵐
人ゝゝく毛利細川の花ゝ　史
聲も賢ゝゝ維の勢ひ　半

顔塞

十月言許六亭

ふゝゝゝ人も年ゝ初時雨　芭蕉

野ハ仕付たる麦のたゝ土　許六
畑実城実ん小松の冷味して　洒堂
汁の麦えたり秋の風そゝれ　岱水
者の方麦へ入ふと古たくみ　嵐蘭
先ユミのもろ帆屋の釣やう　執筆
そゝろの傍雲中小たくやれて　水
焼集ゝたる小鳥もそ清　蕉
粽流む笹の葉ふたゝ閉ろう　六
輾磯（テカ）城の陸るを系良の入口　堂
寂ふ猛ハぬ人も寄ゝ　蘭
永延のけて蜻の食あを　水
青園ハゝふる紙の実迷　蕉
ふゝり萩の風そゝ立ッ　六
八方ハ搗れゝ小服絡　堂

下ノ中

焼山ゝえの実ゝれ赤ゝけ　蘭
寸記を畑も花の本伝て　水
伝ゝも長宗よ蕉の卵ゝ　蕉
芸ふゝく原若の富ゝ　六
當摩の巫城酒よ酔ゝ　堂
さつゝと鶯ゝ幸ゝ言て　蘭
教ゝ伝ゝ実ゝく長持の上　水
灯の影ゝゝ甲　侍　蕉
山時ゝ中ゝ紙出ゝ　六
旧造ハ銀の志ゝ焼ゝれて　堂
風月よかゝ山実義れ女房　蘭
いゝやゝ教ゝ志ゝ伝ゝ実　水
琵琶城ゝえて出ゝ加ゝ物　蕉
五明ハ畏沙門堂の小方丈　六

舌のよいくぬ孤　やしき堂

一をちも青紅葉のふる雨　蘭

藤踊こ下る岩根路の坂　水

冥長のうきすゐもふての淵　蕉

茶屋たしかむ百姓の家　六

ゑ乳のきやめ及て色る沖茶屋　堂

七十の賀の若菜　蓋　立　蘭

深川集

支梁亭　芭蕉

口切よ壊の盃そかつこ　支梁

牛のるこん出を殺の初霜　嵐蘭

ふりくの釜よ絵くへ紀州とも

秋の壁ろのさるしの形　利合

旅人の鞭しよ月のいろろ　洒堂

下ノ共

大戸式揚ケ小出る線月　伐水

鶏の卵のうと式産そろく　桐葉

あくたよ拾を踏そむる　也竹

みとりさ沢六田の柳ま植て　梁

鍛菜きゆくよ大豆のけ　蕉

細うふる雨しも出ぬ蛙の水　合

鍋ふくる宵の　拙堂

ちくしと鶏ゑ石垣　水

酒てを食よなり安ん月　蘭

り雲の長門の国式秋たちて　堂

霧よ拾ひん一瓶の　清　梁

西日入るとふの屋の間ま家　竹

苣の二葉のもえてほのゆく　實

ゑやことい去年のり御ふ無れて　合

見よ陶とる〻釈迦堂のくれ　堂
咲そめて志のふたうれ様を　蕉
多のおそ〻とう枇杷の葉と　蘭
元卑して渋もるよ旅の宿　實
清けよ住連とも由る社丁　竹
日さうふ細うる吉祝夏うろ　堂
そとしれ房のおらへ川に　梁
水つきの稲の穂ふ肩重し　合
くえ美えたる門前の坂　蘭
皮剥の物煮て食ふ青丸方　蕉
上元吹る〻自はろの鶯　實
谷つ〻ひ流しうけたる井筒　竹
夕日拾もうニうろふき　堂
あるも簾ふりふたらしあ　蘭

盆よ美ふる丸茶の数　梁
花さうり御室の路の人通り　實
麦と菜稔の野ハ綿も　合

深川集

二日御し宗鑑う客奠茶一斗天五年下戸八亭主の仕合ふ〻し　西堂

洗足よ岩と名のたく〻き杉
綿雛ふらぬ多むされ屋　許六
〻〻ひ隠よの後伐たる杉も　芭蕉
去ハ〻伐七草もたり　嵐蘭
力の色氷ものろふ新貴　六
簗地も宗よ典茶の苔　堂
相国寺ほたんの花咲ぬて　蘭
挽の蓋とる蔭よ筍　蕉
西衆の差意法ろ〻茶酒ら　堂

むら〳〵咲し小舟島法とる　六
さぬしい育れ鋪の篇成そ　蕉
東　遠方の力を流さる　蘭
青澪の板よ宿を露れ者　六
ふさうの柱拭跡先よつく　堂
糸うけの挑灯志ゆす朝ふろ　蘭
汐さゝかは星沈れ搭　蕉
村い充田面のまれ育を立　六
塚のさゝひのもゆるふ糸　堂
虚空僧の心よ廻るなる紫　蕉
今小舟走〳〵今川の家　蘭
うぢうり後擬の風を孫遠　六
ゆくとゆくゆくふく巴國ゆ巳れ　堂
親家に湯ゆくたる藍れ忠　蘭

よこれし稲よかくる麦れ彩　蕉
馬〳〵成待意つ〳〵れ井戸の湯　堂
力抜よ餐成洗ふ操出し　六
火焼して沾あてかゆなれたち　蕉
ゆり積をかくる年のお成　蘭
ゆりとゆと門の尾小雪傳て　六
言親音にう峠成る　堂
今もやるゆよ沈れ藏とゆつれ立　蘭
奉りの絵よ誰も伝るゆく　蕉
義垣よ木ゆゆ雪ゆる堰の内　堂
月小赤う出る二月朔日　六
ゆり花よ伊勢の鉢の元初　蕉
弱樺（クスキ）茶やく宮川の上　蘭

鄙懐紙

深川菴

力志ろ残いそくやうし村時雨　千川

小松のかしらそろへる冬山　芭蕉

雄麻ちへ巌の遠方れの拍て　此筋

水まつ白よ海へ出る川　左柵

泊るへき旅の酒屋も一里程　洒堂

徭よおしへ迄むれとうしの船　海動

あ出てふくさむ日あり卑月雨　岱水

苔ろ陰のうろ〳〵南天の花　川

笠とれい前髪白ム芙蓉挑ケ　蕉

ふ〻さも寒よいさむ大酒　嵐蘭

高館ハ年穿鑿よあくてそろ　柵

水風呂立る雪の降り出し　筋

昭くさ蕗ち孔〳〵る芋と鯉　動

下無

傷寒中〻けあうなかあるる　水

伊豆の海市沙よ私を漕入て　川

一下夜の法よ宗旨定る　蕉

鄙懐紙

本拓〳〵ようめる写ふを死人縁ひ　荊口

毛と引く鴨とのとる俎板　洒堂

愈乞の中振さに徒ら芋て　芭蕉

ところしハ木履ちく反　此筋

梨の枝おりぬ成ハ芋ハ力　左柵

桶よとこを芋売のあく　大舟

秋風よ架こしらゆる奪ハ有　千川

嵐のこたる梁の弓　蕉

六月の日も照つ三十人作の木　堂

ち教の不〳〵為渥ゆるまる　柵

[illegible]ぬ[illegible]ける[illegible]供[illegible]浄土宗　筋
[illegible]面の[illegible]の[illegible]もる山　陣川
[illegible]ふせの弱[illegible]れた[illegible]笠[illegible]後　舟
[illegible]俵[illegible]至の[illegible]秋　堂
[illegible]代も[illegible]ふ[illegible]と[illegible]ふ[illegible]と[illegible]れ[illegible]宗　川
[illegible]ひ[illegible]て馬の[illegible]く[illegible]る　筋
[illegible]八[illegible][illegible]れぬ[illegible]　柳
[illegible]の上[illegible]のは[illegible]る陽　冬　蕉
[illegible]かけ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]の[illegible]
[illegible]成就して
[illegible]いて[illegible]む[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]花[illegible]針[illegible]

[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]　芭蕉
[illegible]文[illegible]芦[illegible]なり　芭蕉
中[illegible]の[illegible]も[illegible]ふ[illegible]捧[illegible]て洒堂
[illegible]の[illegible]ふ[illegible]　峯
[illegible]吹[illegible]の[illegible]ふ[illegible]　蕉
[illegible]の[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]　堂
[illegible]ふ[illegible]油[illegible]の[illegible]　里東
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]　蕉
[illegible]出[illegible]器[illegible]ふ[illegible]　峯
[illegible]合[illegible]て[illegible]　東
[illegible]ふ明日の[illegible]と[illegible]り[illegible]　堂
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]　峯
山[illegible]れ[illegible]生[illegible]　蕉

梨地蒔けし兄のさけ　翁堂
名月や雲井の橋は一ますけ　東
今年の茶は宵員嬢し　蕉
花よ来て我名い備　徳堂
芋いかりぬこ藤の人右　東
陽炎の庭よ揺へる株折て　峯
たゝぬ夜よ菖蒲打　堂
そんとうよ眼い後の抱れも　蕉
意のあいれをみよや鳩　胸　峯
揺うへの岡は志ま〳〵後田後　堂
英流い伊吹てさむ江秋風　蕉
夕月よ若鞍は下を玲の音　峯
醤ふしはをる質の宝一入　堂
麦飯よ交らぬ仮とうふて　蕉

下ノ巻三

徳利引をる川舟の舳　峯
帷子よ風もそ〳〵江中小性　堂
明日の返事を美唇の外　其角
うつくしを多け匂ひを紙せてる　峯
人目よたつと引ふくろ陳牧　堂
一点よ地を接視の花さう　角
脂よ日のさを芝を彩めく　峯
雪ハはころの石よいしひ　堂
累且帳をそれ皆のけ石　角
句兄弟

十二月廿日昨夜　芭蕉

ぶようて花入されうを　椿
俗こむまれる事の宿　彫棠
用よたゝぬ江ま青ゝて　晋子

羽織のよさふり袋　黄山
夕月のたふさけおるる人の肩　挑隣
出ういりをさて秋をせいた　銀杏
網小成る衣いいらゆる褄の色　棠
肩てやしなく架ち県の勅　晋
そもとよ茶稚ハ引てけし蛇　杏
茶と煮て上を洞漑の学寮　蕉
下張の反古えんをく枕して　山
作めたい猫の分弦ひそめ来る　隣
ひつうや徐よさしも蛇れ魚　棠
硯法度と兎やせうるく　晋
（二夜）貝の雨宮の方して屋ちん　蕉
三すの残て弦したひ唐　隣
さいつと嬉をとやと鈴の力　晋

下ノ卅四

蘭と茶とに之とうる　疫　棠
玄ふる和尚しあ弦あ弦屋　杏
高くよ水弦上る箱戸捅　山
山ちのわうふ弦ハ辞なく　蕉
眠りかくるつ合歓の下閣　晋
うけむうの稼角る床のふる　山
れもいぬ糸よ屋の沙待　杏
氣とて曹洞宗の音かよ　隣
集す冬ふいくく弦やく　棠
えぬうの主人よ兎弦和ノ凧　晋
をうさ分かくを傘ノ　蕉
弦らノ紀里いい皮けて敢の力　棠
波りうノえい声いく紀乃　山
松茸弦近々跡うくいい仮ふよ　晋

そくさいかるみはりしにあり　杏
老たるハ卿羹うみに畏り　蕉
花のかをよくしこそ揚貴妃　棠
附さし戎中にていろ〳〵拙なる　山
こそ〳〵の紙の跨く三弦　隣

小傾城りてふらんらめ書　晋子
既中そそふ伽の薫物　溪石
吹をうた待のひたのからみて　芭蕉
かもるそろになるし　盃　普秋
羹盤戎ひそふ彈く市の中　盤子
いつも自由よ出湯のり　水　史邦
井戸の茶こにふ〳〵ふ方めぐ　去来
胸をうしたる早稲の朝風　文艸

下巻三

恰のいろかひあれとしれれ
元禄六年
人もそめ去り後のうれ松
去来のもしく
苔菊のさしそすこ梅花
春と秋集
衣裳して梅たるたむる匂ひ　曽良
嫁めつらしき入りの松（三月）　落山
掃おて消る雪をかうふん　路通
石のくぼそに墨戎をうり　芭蕉
月移る蔦のそそ紀踏表て　山
のたうつ拙のうへる芋　畑　良
綾のふう清き なちぬ秋の風　蕉

いこうね際干を宮の面つけ　通
あちをふく義ぶたる岡の脇　山
寺の物こゝる羅の除さよ　良
振足上ケて拭あてられぬ大鼾　通
聲の利鈍を町よいろめん　山
自俳りの酒のかゝ味も附こゝ　良
有も今ゝあまとゝん所馬市　蕉
物衣をさめゝけぬしに寄れて　通
我ちゝれゝ名ゝ我ハ芝山も　蕉
花の庶宮の泊よ注せけり　通
古巣の旅のゝびもたゝ夢　良
講堂よ傳ゝるゝふゝけくれ　山
流よおつる悪あの れ　良
形代よまゝゝ若ゝ氏連背　蕉

下ノ九六

こゝろ星の宮ゝ氏　風　通
やねふきもたゝれゝ不破の関　良
植ゝくれたる田中の小田山
ゝゝよ医やせて宮ゝやつゝん　通
我ものゝおもひ世一人　蕉
此意我いとゝんとゝれゝ吹ゝ　山
うたれてこゝる中村の繁籬　良
拾ゝ月我ゝとゝゝとの足ゝ　蕉
ゝゝのたゝうゝき谷の　乗　通
火我禁て岩の間ゝ冬義　良
圓我ゝよのゝ　頃　礼　蕉
おとゝゝる狙ゝの白髪を氣にけて　通
折ゝのゝゝゝ草のゝゝもの　山
入ゝて舎ゝゝ野の花の奥　蕉

行こうれよやこの長月三十雲　山

俳諧集

五人扶持ちうて志ちうて柳れ　野坡

日ようしに雪新の　音　芭蕉

撫宮の有弦ちうに山こえて　〃

そうそう弦うけ維ふの勢ひ　坡

行かうかうてもあけぬふの宮　〃

徳利よほして酢を買ふり　蕉

丸三年孫うう孫へ孫をして　〃

境の云事の今ふ物せぬ　坡

玄白よ松も拙も名の蓑　〃

うた世の雪をたえて後ち　蕉

瘦脱よ栗を一日搗仕舞　〃

穀入をよとなふられて法　坡

鶏改も頬こうるる秋文て　〃

羽うちこうハを雁よ有新　蕉

口しにことしれ酒弦試ふ　〃

ちうの佛へ朔のとはしへ　坡

咲く花よ十府の蔓菰あそぶく　〃

こ弔茶畑も摘しはこう来る　蕉

そうしとよとまぬ水に玄の風　〃

孫の示よゆ人日ちらく　坡

竹笠よく世のとる仏を自眼　〃

やを味雪の灰ふそそひて　蕉

一掘りくてあつめし屠　帖　〃

りく人も移雪のろうと除　坡

お歯黒ともらひよ中戸さ祝　〃

ひのしの栄耀今い若よやじ　蕉
市原にそこそこっとふくいろ　〃
弁おむよハ故の名うとい　坡
方新よ小参仲間の傍ひつれ　〃
蕎麦うつをはむる肌寒　蕉
ちらしと相の実ふるる氷粒　〃
書付てあさ金の鬢古日　坡
粥とう花おこされて繋けつう　蕉
猫丁型こうろ人を急し紀　坡
伍の花の蕊ぬ工夫有京　蕉
帚目のうつよきしの蝶　華
俳諧集
水音や小鮎のいさむ二俣流　湖風
折もをさる筆の刈　株　芭蕉

下ノ巳八

乙切なの筋出て　佐蓬
刀の柄よくふ　状　箱　利牛
食傷の腹紙ほしの朝の方　風
豆腐てあそ盆の友達　蕉
小ゝ十人小家ハ本接の五巴し　桃隣
銭一文よ下駄代借る道　牛
菎蒟の色の黒きも孫ちみ　蓬
柔のとを忘い殿の数　鏡　曽良
うるほとの子たふこと猫の涙　蕉
古き簾ふころ鍛冶る　風
小さうても砂切を歩く赤馬　牛
蠶を焼てたれう食そめ　隣
方新の白ゝ俳の長寿　蕉
盗人うへる蕎の朝　蓬

沓掛の駅不のこうふくれの雲　良
ゆくも雁　合よ蕉うつ　朔風

鄙懐帋

丙申　芭蕉

傘ふれしふたたる杵うれ　濁子
うつの夏まむ蛾の氣さし　涼葉
れはろかいまと巨燈をとぶて　野坡
候の去よ孔いんてやる　利牛
せんたくをしてう新のうろう　宗波
蓋らまてまと出を吸もの　曽良
湯入り底の今美作と詩社堂

蕉翁の扶のれしし合て　蕉
まひこりし廣業の茶室を変稿て　子
ゆくも墨よ衣を出てれ　牛

下九九

伊勢のはれ又変稿紙してお涙　野
れうしうの道仏の沙法　波
金拂ひ名月まてい遅られを　葉
のほり日和の浦の初丁　良
秋もとや外てはうし尾張　蕉
清涼たくはよの繋結てやる　波
左示うまを出れい花咲て　牛
瓢の燥をとらう麻稚　子
蕉の元十方今れのとし　野
的千ふ出もとしむ精進日　蕉
笠卑のひくハ酒を喫も　牛
先を振ものう書めしうよ　葉
ひつこうよ屑宝に出紙を味　蕉
まるくちをるる鯖のや紙物　野

往云も母うつて来て寒ク　牛
木綿ふきたれ　言安の墨　蕉
冬場より紀内の畑の一筋に　子
無遠慮多の賜たそうろう　良
念佛よ小さい紙袋に財物入て　牛
巳又十日よ居あく去　野
義陰ハ麦も延たり霜枯　岱水
芋入たものなとへハ語　葉
男子も枯ひ付ク紙屋の辻　野
麻入もそ年一年の書はと　牛
切り抹も茶本ハそれのうれ　子
ゆけうゝ歳ろ思の細　洗　良

哀法そうそ

西行の庵もあん家の庵
許六翁
糸のもの　ものもも似よ本多丸　撓
うそ人の撓ものもるら本多丸　縄
芝掛や菅ものもしたるなやの軒　移風
本多丸そ年すし紀味を知ら　畏角

炭俵

そ豆のそ乳吳そ麦の　線　流屋
屋の水路の乞る溝　川　芭蕉
上張りを通さぬそ乳ものて　岱水
そ川とのそけば流のそ乳中　利牛
麻布よ紙も麻で居ぬ麦乳　蕉
と於りと堀のそろそ秋風　屋

ぞろぞろし次郎の下ろう吹出して　牛
曉の仕事の工夫をするなり　水
姿をとんぶりもらとはし　屋
偽形のもとへ先ず城を　義
風俗う衣服の帰りつり　水
家の流を跡城見まり　牛
羅付ろひ者ろう能あって　蕉
系の買ひ金城下へて妻出す　屋
世ぞ人ぞやし花の辭ある　牛
拵り抑を今ふをとしてて　水
雲の跡吹ぞうしたる徒有　屋
ふとん丸けてものおもひ居　蕉
不在ふ降と中のぞろぞろ　水
ぞんち接を城上ぶろうぞ　牛

法事のひとを出本し沈芳志　蕉
蛋とそれたる金城たつ数る　屋
気の侍よをとんて疲れ沈芳　牛
客を送りてさける猫　義　水
今の月に雲の屋さを作りて　屋
年貢減んと参られたり　義
息災に祖父の白髮ぬて　水
悔恨ふらぬ七夕の照り　牛
名月の月に合せ芋畠　蕉
ぞろぞろしい雲の屋　鉢　屋
世沈い者の通りもうれらきし　牛
ふの根係の　祇ことうく　水
はこをにてよし風の吹出し　屋
ぞろぞろの上をを荘さへる　牛

花見とて女子ども打ちつれて　蕉
余の事ども小茶わんほど　水

深川にて

[illegible]成たや風おとろかす滝の音　史邦

玉笑の宿にて

あさがほや白い隠おろす一つの宿
朝皃やこれもけさわの露ながら

翁草

[illegible]おのれしと割帰止む　泊圃
年為しさとぬよ方ハ出にけり　芭蕉
春下にはてもとる板のち　魯青

[illegible]酒よむをとれ猶直うて　泊
栗丸を切る川上のやよ　史
おろしと形のわるれ拾ふ　可
寺よ帰を居る表仮　蕉
雨ふて白く咲たる藤の花　史
徂父ぬ[illegible]の紫にとり付　泊
ふとしくふ貧乏神と名をまて　蕉
強馬城かくる年越れ　可
さいりと雪ふむ道ふ仮ぬり　泊
見世城呼てとだり出とる　史
猿棒城戸場の布の伝馬　舟
服疲痛のたやりちりやう　蕉
そんをうと苗代ぬくむ花の色　泊
光こうはまぬ伊勢れ[illegible]ぬ　可

春風に吹きほころびて袋衣　史
貧に流るる百両の　家　泊
きるるく疲るる歌も化粧して　可
業一わくらし白毫塩の扶芙　史
孫土獻離れさとふる徒花　蕉
春過ぎとくもとの居屋敷　可
うき事の佐渡一番に出立て　泊
名古屋城を切り五重載せ子　蕉
かちけるる紙屋ふハ松の列に　可
秋とぬらをを月の方　泊
所志ねの上に風吹にて　史
ぎらしげも這ひまる　可
をくろして亜ふ院家の歩列　里圃
夏もふ能ふいくひとれ宰　乙彼
雨ふれいりに土のふはひ世　泊
縄てかくます家ゆうをけく　里
塩ぬる問ふをかをるれさうう　湖
家良いやりうり八重撫うれ　泊
ふ文庫　史部
帷子の日しにをさ中一勝寺
秋を弁ぬ稲のこと　貿　芭蕉
蓑の穂ふ蓋れるひとかれ分て　貸水
扶帝ふ人のたうる夕　月　邦
木刀の音すへたる石合ぬき　蕉
二階はしこれうをとき裏板　水
寒さふ家の中を吹立て　邦
石町おをいを紙ちの袴　蕉
畳油工ふ紙着ゆうれかを展　水

ゆびこうへせとこも頁ぬ小松魚　邦
肌をるる紀陽の和茶のこ合て　蕉
秋入とさのん動氣ふくうる　水
樓閣より侍りたくきたる青丹方　邦
五位よりおこさし書のいさうひ　蕉
扨おーの戦刃も猪くさう　水
工楚衆のくさくるる　邦
花よ森ん一寸きる紀第こ　蕉
小性の口れきとき三方　水
牛搗の肉ようをむ亂宛　邦
馬の糞こうく後もいそらし　蕉
神人言に洗濯貸ばおけ　水
ひとぬもろろしー濃くれ吊　邦
撓うく小市れ中一直ぬ孫　蕉

汁あたくかされ日ハまられも　水
表れひるこの下ろ落ちる　邦
百里そのすく乱れくるし　蕉
引割ーセ佐找末の行れひ　水
こうもるれぬ中ハ生ゝ　邦
云たほと孫よ金ふ紀有の蓋　蕉
そそ獨然待て晴のけ　水
そう新よ抽てきたく屋ら　邦
陣ろ重出る霜うへのう　蕉
小ゝるこ言ふ言れぬ紀流　水
二表三日の終るおこうたき　邦
考へてよーれ美れ乱さう　水
百姓やをむ苗代の陰　蕉

老の名れをとりて四十雀

画賛

鶏冠花下の石の苔むしたるあるにし

鄙懐帋

仲秋雨懐故人　燭子

名ことはりくふく雨のはれさまて

客は花のたちぬ出の青　芭蕉

秋を待て屋ふ定まる石の色　千川

すこし生ふれの酒のこころ　涼葉

殆なくぬ鼠紙おもひ懐よ　此筋

曲ものい板の下よえる蛾子

捕人の矢先のけよとまを振て　蕉

蓑を宅よう雪のちらわく　川

万年青

入口の蓬紙をとたのひまり　筋

そうの鶏鳴よ後板とくく　子

身こそう徒くいかりとの涙　華

怪うあこそるの洗ひ雑る　川

伏見まてれふも足袋の面抜て　蕉

飯の張をもくへおるく　秋　筋

力新よ爰ひとそ思へ烏帽子髪　子

厩の夢のたひたる　露　川

花笑ハ本馬の車賞とうて　蕉

ほうもたくぬ玄の波用　筋

鄙懐帋

いこよひ　こう多園の月ひ　芭蕉

猪私の垢をこのもそ浪新　燭子

近を小雑波畠　波多付て　仙水

肩のそろひ一茶の持次　依し
又こゝにも根ふ日に照る村しぐれ　子
青菜煮る香の田舎の窓うち　蕉
寄せさのおこと女房に魚まぜ　水
叔をこうこう湯に山伏の髪　蕉
美皇子ふと一めて草鞋奉り　子
渡しの舟てまの名こそ伊　依
鵲の巣に雨ふる沢の雫りて　蕉
くけ曲輪掃のこを咲　子
梅の枝下しのぼたる蛍れ方　水
咲きら信る後のや姉入　馬莫
雨ふる夜ふる花佐城主守　子
うらを果てや琴箱のこし　蕉
都ふる十日を遅き花さうり　貴食

下ノ平七

瓜をたてる猶活の茄物　水
年礼を御作の下人を隠て　貫
烏帽子ふ是ハ元も陽ふい　蕉
持つをめれを刀を右にかしたり　子
よれい跡たる馬のぬく髪　良
芦川やとや育れ衛を踏ちゝ　涼義
通祖のやしろ有城えふく　子
我恋ハ千束の茅城積こきね　蕉
雁も大幸ふふくけり又　童
眉化るこそ仏よりし水後　子
大原の紺屋里ふ久しき　蕉
数多く繁ハ牛も富貴　栗
冬のくふとにはのしろ城釣　子
初時面六里の拡代伝ひ来て　蕉

老らわらちのいつ、夜たもし　蕉
朝をきをあ籠の紀をを保をを　子
筍あ〳〵古　狂　い　通　蕉
雪ふらい雲車に乗をを紀の山　葉
ゝる風を〳〵谷の細布　子

嵐蓑　恭

秋風をあて悲しを楽の紙
風葉ゝ孤る公思ぶ
笠一のゝもと世紙の秋とちらも　其角

茶碗と椀

角のゝ〳〵い机の端れ

鄙膳帝

十三夜ゝらつ丈寒ゝ　湖十
小神の糊のゝ紀蕉ゝ　春色
焼飯ゝ瓦の粕漬にあけて　芭蕉
荏胡麻のゝ〳〵に四十雀つく　史邦
雨きうら笠の手反りの志ゝ合　杉風
漬ゝを流を風呂ゝ水をゝ　涼水
ゝゝ麦とゝ色朝ゝけたゝゝ　涼葉
幸ををゝい栗拾の実　蕉
松枝をゝさみ掃ゝる寺門　良
ひゝゝ蛾の冬のゝ〳〵ら　子
巣の実をもゝくゝをぬ色を　水
なゝゝゝゝ人掃ゝるく　蕉
ゝた月松麻の夜の紙ほゝし　邦
雲ゝゝ雲ふ　芭蕉　刻　秋風

未廣敷打ふかけたる紙屋の女　子
庵うち地こそ〳〵に行器の食つゝ　葉
えの什と筆紙そうむる初花の　蕉
雪晴て旅ゝ出ると思ふそら　邦
麻ゝ笠ゝ指と動くひゝ沖　水
中無ちふむ見う勝え　蕉
見ゝゝゝゝ雁いろ〳〵紅切紙て　葉
敷よい似せぬ饗応の　邦
さうゝる信居の杜丹又て鴨　風
繕えつゝて出るゝ居なる　水
笠清〳〵む敷の迄てゝて義も迄　邦
見ハ山くゝて信れ　良
よこれわる敷は編袋裝れ　蕉
伯母の信ゝ　耐人の魚　子

ゝゝの月実拙の梨の種ゝ迄て　良
枝もく葉の指ゝちひさよ　葉
露霜小玉ゝゝ日ゝる蕉ゝ　子
ゝゝ細月ゝ明ゝ着屋　良
初雁ハおもひのおに安ゝて　水
信ゝゝ屏風を迄ゝ多蕉　風
義ふゝゝれ紙かゝしゝ空稲　葉
もや鎌金の道の義州　邦

素堂亭

ゝゝ伊の宴紙紙屏風の　子
信ゝゝく小秋菊紙紙　葉
ゝゝれるや屋ゝゝ屋の屋　蕉
葉の乳係ゝゝ信ゝ敷の牛　桃隣

抽のいろや紀あうたるさくら咲　其角
さく畠ゑもあるも紀あうたるさくら　馬莧
八ゑのゑもあるはすかさくら咲　伯圓
何矣のかさしにもん菊の枝　雷良

竹田老人と京琴ゆかりて

うるーせぬ琴やにたるゆ咲　素堂
蘇つうまふ城をのもや大根引
林やさく紙とれいろ紙を入掛　野坡
弥送あれたる青の土　大根　洒堂

炭俵

廿日洛川亭

振うむ[illegible]れて通ひ来　講
うつてはやもゝ隣ゑもる新　野坡

番頭ら振の小節城境つねし　孤屋
行元ゑよ有城ゑこうれ　利牛
好物の餅とゆ名物の風　坡
ワ末の安ゑ圓の雪　蕉
細の者通つゝ鳥に声ゆて　牛
里さへゝえに二十八日　屋
ひとる紀い弟ゑ軍ゑ大事ゑ　蕉
俗氣の雪ゑ雑俵もせぬ　坡
ゆきゝむ[illegible]ち灯を受ゆそ　屋
肩癖ゑしる陽屋の青菜　牛
上ゑ北干菜剥もうハゝたち　坡
馬ゑ出ぬ日い内て魚をる　蕉
絢賀の七ッゝうゝ紙言俵て　牛
嬢ゑ門ある五十石売り　屋

此時の餘鬼もろ弦をる月と花　蕉
冴つる暖のうつる青　牛　坡
我畠の糞も蔦つく雲れ上　屋
吹とられたる麦ぞうふり　牛
門戸しめ弟しの水とあふぐう　坡
平地の寺のうを死数　蕉
干物と日向の方へいさ〳〵せて　牛
活出を鴨の苞月ぐく　屋
蓑用ふうを出をたつる糸後　蕉
まゝこ汚活ふ〳〵小娘　屋　坡
ちゝくさと大晦日も四つの後　屋
云葉の好む時の行先　牛
中〳〵て傳米合の借きゝ　坡
塗とたをさて麻せぬ夕月　蕉

風やゝて秋のかもめ飛ぶ　牛
雁の吼るの綜をひうも　屋
ちゝほらと糸の揚場の煙　蕉
同黒糸りの連の孫ちまく　坡
とともかも花のこ月中時分　屋
梅炭のちゝを排ふまこうせ　牛

炭俵

雪のれをれ口元ぶかぶし　坡
日の出る前の赤ゝ　孤屋
下着と一番法へうちあけて　芭蕉
ちゝとこゝ大名の供　子珊
牙ふあたる風もふ川し房方教　桃隣
栗をこゝれて房ゝ畑地　利牛
熊谷の堤をれたる行の水　徒水

おこしらへて繁ふ〜賣る　野坡
二三尺の藤瓜もらふ門の服　珊
馬の沓拘のさいる手　松　泊圃
井の皮雪殺に賛る葉枯末て　石菊
編まるのさとを西のけら〜　杉
まお者の一人もなき浦の秋　坡
うつさる風のたやる盃　利合
青しの方ば嬉うちて揚大工　依々
脊中へのはる児を手先うる　桃
茶むしろ敷陰なく上る紙衣　珊
川こう浪くに小船いらする　菊
報恩寺にて氣味よき雜煮　杉
脊戸へまるられを山へ引道　岱
和おもひたく難〜と新かう　孤

ひて集めてい多地搗進日　曽
餅茶と搗て俵へそろ巫　桃
わさしこと世て宗代の礼　依
雪糸てふくいと向陰こ紀ち　泊
隣へりて火ばらうてゐる　珊
まことけさも佛の飯て塔を　牛
損そうつ〜て賢と新し　杉
大坂のくまをれたる葉枯　令
何ばこまれい祖母のまよ入　坡
そけぬる所蕎の篇ぬて行ら　珊
次の小紅屋てはよむせる声　牛
約束にかそて居ま数に食し　曽
七つの稚よ賀る手ままる　杉
義此高ゐ〜そ人間にふ生て　桃

男子つとよ蓬をそろゆる歌

鄙懐帯　　路通

水仙はうゑをる筑紫にぼうぼう

宗の細見よ云らく茅屋　杏雪

我猫を殺生猫通ひ猫俤て　芭蕉

干ことされたる絹濃の方　亀仙

和歌よりしめ絲瓜の吹合　千川

仁としいそれてつくる白髪　執筆

尊入よ茶壺入とのゝ名をうて　雪

意よ古瓦の殘る奥をぢ　蕉

ゆゝしく紀ゆゝをつけて見ゆ　仙

歌つもれゝ〳〵青ッ苔ける　通

行里小杉つとつる布をる海　蕉

鍋そゆへ垂くゝ名月のえ　雪

ゝゝしと業慶かゝ武蔵の毛　川

一解あくる雁の朝　家仙

ゆふゝゝは堤ゆうて来るあの沈　通

乱ゝゝ後いまつゝぬ年号　蕉

猪猿や主下小夏ゆ花の奥　川

雪の合衣をやくくる毛こう世　通

武石の上をうゝ紀世にまくうて　蕉

彼岸ゆいゝと猪ゝゆ　仙

り毒小中小武ゝよ作るゆし　雪

云ぬゆもひの志ろゝ海息　川

元結のほつれてゆくる衣ゝ紀　通

人の情武つゝ人情　蕉

俗り出つ萩さくく秋武ゝと　仙

俗帯ゝさゝつとゝ本ゝ武橡実　通

月の有亭主蕉持出る蕉
持たる每の底にうりけり 香
庵人の新米炊ごとに川
出ぬ〳〵俗を分とうつる 備蕉
個を一名も山ところえぬかう 通
塘の家城侍うりむさき 川
あけぬのい紙吐上まなく 每仙
あつをかしら伏ふつる青柳 通
花さう〳〵舞う蓬と教えて 蕉
うぐひを持ふ中さぬのうら 昔
鄙懐帝
并焼やとを物の田舎の初氷 音蕉
拳でをし一郎 屋む 鶴 鶴子
鐵下に猪をむしろに寄ると 東東

わしをぐむくれ拔の木 蕉
うを有表干鰯俵のおさく 子
作くむ牛もえぬのさ青 兼
嘉兵の小村小祝伏ろ入 蕉
接のをくのころ注連縄子
求食新大堰焼の旅いく 兼
撥をひゝちふるあ石京 蕉
月ちうい孫よ吸行接さて 子
和田後又とも招えん紫 兼
麹元の来ていを蕪伏荒る 蕉
余ぬうう〳〵紀方の拔折戸 子
出くうと新〳〵て聲武雇いて 兼
松もをくをる新仏の接 蕉
富ふる命ちうれの住子

[illegible]
雪國はさすがに馬も繋がれて　蕉
日記はやうやうしく一帖の紙　素
旅癖やふる五月の虹ありし　子
名残り惜かりけるに安氣の廣瀬　蕉
青柳いとゝ去ぬ物毋なつかしく　素
元禄十五酉の酒の興　厥子
焼たて豆腐ふ鮒とる人の方　蕉
[illegible]　素
[illegible]　子
[illegible]の市て魚をとる　蕉
[illegible]やう成餐て徒了　素
素菜壺垂を家の竹隅　子
[illegible]やと故郷忘れて　蕉

湖水もしらむ俳諧の新芽　素
うゝ雪のうへよ養のうしと　子
俵の蓋成りく見る油　蕉
折る花よりたのする袋町　素
見れうゝ出る天神の文　子

寒菊隨筆　蕉

[illegible]ふ雅の吹る臼の埃多
[illegible]ふ大根　野坡
さけてうり[illegible]をうけ初て
[illegible]を[illegible]の美　蕉
門よ[illegible]を[illegible]の日くもの[illegible]
[illegible]も秋の日くもの[illegible]
此一谷に栗の御年貢　坡
七十ふ[illegible]成[illegible]ふ助[illegible]　蕉
[illegible]通りうゝ[illegible]しゝけ　坡

すしさい堅田の出陣とくつへえて　蕉
蛙なる半の声、耶やをむる　坡
裏深き寺の男のうろ入し　蕉
そ日よもとる藤の花の外　坡
そ一法る師走の口成食哉　蕉
絃よ法とつけて咲る夢　坡
田の中まほらせぬ石ぬ手ふる　蕉
芝よ通ひく方徳ある　坡
花の時絶又いそたくふれ人　蕉
儀て来ぬすきの花之　坡
慶庭よきぬ法深と引義
逆上るのよ法居　不　蕉
裏合せ根敷のうろ義の暮　坡
[illegible]一の深の痛む哉　蕉

年ふて分ハ芝桜の遅ら　坡
法て酒のむ系扶の　蕉
ちくしと板の風のあるかと　坡
稿ぬと人の徳系て　蕉
方えをい知よ不見れ出ま　坡
こはまて嘉ハとこ切やら　蕉
俄よそるあこよはこ法繰て　坡
仕付てそこ法翁方の岩　蕉
田茂柱ら白ひ迫紅の手の出来
天乱よふこ家の神ら　坡
續猿蓑　泊圃
猿これよもれたる素の拡義
日ハ素ふれと新なる　芭蕉
水かこ池の中より及あて　支考

葉ばしまして葉をいたく　惟然
雛のあるとやうて氣の有　蕉
通りのふさとふえ世たつる　考
釜仕舞　為て亜墨の鯖の魚　然
豆腐の解ぬふ[illegible]　蕉
奪このまてうれとも世とれ西強　考
中國ようの狀の右左右　越
朝日の日ハここへやら振奮れ　蕉
一重羽織の矣てたつぬる　考
幸さんし和青苔の汐れ振風　然
山よ門ある有明の月　蕉
弥氣留の人のかけまうり　考
水俗ひうる陰のふ鶏　然
見て通る紙三并ハ花の咲かう　蕉

下[illegible]

為ひとうふいと永き日　考
古ち風のみ西よるうふよ　然
わうまに豚を大事からと　蕉
陰峰の内氏ハ今交屋芝ら　考
宣氣の沙法もむさとられぬ　然
大せつふ日ろ二日ある言れ後　蕉
雪うとさけ一中れとろ　考
まろ後の系うけハ乳出氣　然
奥の世並ハ近年の俳　蕉
海ようも者のやを紀尺えと　考
赤雜沢を亦屋の心　西　然
宮ようぬ眼のんうふげめ　蕉
森汗のとまち今朝うたの愛　考
高義沢法らとおれ和の風　然

大工ひの製する寺也　蕉
茶毒もくふうとて帰る之　若
かゝる人て市の中を押分ん　蕉
氏あくう孫生いに花のけもるて　然
野のあくうのまきぬけぬる　考

俳諸集

いさゝか雪引居るいれる　芭蕉
なうれの敷りふ拾る永叶　沽圃
書こうれ此居をさて　馬莧
之味せんさける橘の実食　蕉
中人有拾を至咎ふ臣る　圃
食こそくる秋さむさあり　莧
露しもに附る彷るゝ結髪　蕉
大黄の葉の義をかさる　圃

力なく肱はそゝしう紀夏ひ　莧
絡人甲斐もふさ木綿布　蕉
打佛堂六尊を表に出さん　圃
ありさ伏蓉て彩る雑汁　莧
作りの後十こ文の相場ふり　蕉
伏見の橋も京の名物そ　圃
懐へたくて入る夏羽織　莧
親仁くゝとゝふかゝる　蕉
有花のそうう仕出む垂蓮　圃
陽さたちて候へられそう　莧
源水のそくし為るこれ風　蕉
門のたうはえそるいと　猿　圃
時の方小一村内のうう通り　莧
流よう琵琶伏出候ける　蕉

鳥とふおはをそろへられてこそ　圓

雪の細江の山をとろう巻く　苞

ふるにはたづみ　の井　龍　蕉

俳諧新式弁　後を　圓

墨絵の小紙小襖のうらみ　苞

吳服の茶碗と雲に出るく　蕉

かや葉の二階城若ちにち　圓

月を隣ふ藪痛なさく　蕉

行くあの一番花ちる花すゝ　圓

晴よ酢ちくろ抽ゑの切形

秋の空ふくるる孫切者　苞

奉加帳よい附めこゝろ　圓

不玄俄よ花さくゝ山のうゝ之位　蕉

田舎の谷よふまるうゝ　苞

下ノ巻

初雪や水仙の葉ふれたいむけと

ゑ仏も三十日ふをしられる

え孫七年

年年年年ゑやいせの初俄　杉風

ちちれくのふ寒紙ん箱の海老　孤屋

月下ゑも中のゑゑや年れ月宮　野坡

七松の親の名てゑる月美都　盛水

養殺屯木ゑの句の捨ゐの

年たつや家中の礼ハ星月松　其角

芽の梅弦たくむ　圓　帝　介我

雲も雪茶ゑのうちゆくかゑ　岩翁

山ゑうゑゑゑゑれの町　根風

ひゑゑ只夕を拾ゑて　彫堂

故きり竹に丁ぢ秋ふかく　横几
有明のおもかげ鶉のなきもの　芭蕉
帆をハ合ふ紅ぢの雲　仙化

鄙懐帝

卑しき子ハ孫の非氏ちつるれ邦　凉葉
ちと雲の雪こうぬこ　千川
門番の蘇鉄よりもむ友なて　芭蕉
今朝むよ初る苗載の材　宗波
秋風よ逆とたる裏を浦　此筋
ひしも雨板ハ風定落ふる　濁子
肌寒く痘のうと城下ふ　川
ひなふ墓城付て恨めと　葉
疫寺の老尼ハひろう裝束　子

下ノ卒

宗良ハ津の内ふるてあれ　蕉
掛とたをふ袖のうひ城もみ　筋
金の壱扇城園のかくさみ　川
乞る成よ源氏一級の見いしく　葉
捨てうき世城やを紀僧正　波
おを金も伊せの料紀ハ兼相そ　蕉
裸足てあるく内屋の砂　筋
朝方よ花の雲り物せつれて　川
日乾の成の京ぢをぬたき　葉
石垣む義表の奥ハまう紀　筋
地取りの株よりんもる名苗な　蕉
う近ハ庵うぬ庫の系城ちい　葉
寺のひうハ四五反の秋　川
ゆ方よ極末つ生塀の被　左柳

とらあ荒とあらふ　軒　葉
先指ハ去俵翁の一縄を　蕉
見て居る内ゑ　帳まの子ル　筋
うつふきて糸とすき　成ぬ　川
おいれ　まもふき　講の　歌目　柳
三糸の指ようう　西ハ　ふ　葉
糸屋の二階ハ　俳の　樓閣　蕉
英　紀　も　大　く　年ふけて　筋
恨の文をたくる琴の　川
られ　ハ　本　てのほる　懸け上　蕉
言　ま　ま　む　さ　たんは　葉
清雲崔　山　日　紙　けに　鳴って　俳
度　紀　ほ　糸　る　せ　吹　華
慶俵集

梅う番ふの　と日の出の山法部　芭蕉
ところしゑ　維ふの　ちたり　野坡
家　　紙　の　ほ　と　、
かく　の　俵　ゑ　う　茶　蕉
宵の内　ふ　し　と　せ　力　雲　、
義こ　ゆ　を　秋　の　淋　き　坡
御　紙　へ　茶　ら　ハ　る　ふ　ま　、
浪　紙　か　た　う　人　ま　さ　ぬ　蕉
糸　良　通　ひ　日　し　ほ　ふ　る　細　る　坡
ふ　ふ　い　ま　の　ふ　ふ　ぬ　六　月　蕉
紙　た　る　味　噌　ふ　う　小　き　る　高　居　坡
ひ　さ　と　ゑ　出　を　お　袋　の　こ　と　蕉
あ　も　と　ふ　尼　の　杖　病　と　ま　ま　分　坡
ふ　ん　こ　ま　く　ま　ふ　ぬ　る　名　月　蕉

初丁は宗うの下地なるべし　坡
素を相手とする居合一ト拔　蕉
町流のたちうりと称して花の位　坡
門て押ふく壬生の系仏　蕉
東風こに糞のいとれと吹出し
ゝ
ゝく居るやうに肱とつゝぬ　坡
江戸のたち向ひの亭主登られて　蕉
こちらもいきとかゝ白城傳ゝ　坡
方しふ十数の内はかりの雪　蕉
桐の木るくゝ力さかるなうう　坡
門ゝのてたアいて麻なる面白さ　蕉
いろゝたをこて表うへとる　坡
沙弥は女房の教るる者て　蕉
ゝと叶ぬ也ぬ浪人　坡

下ノ巻

法印の湯治成おくる花笠　蕉
縄は伐下りて青麦の出来　坡
とのかもも来のうとに宮とあけゝ
魚は飡あくく淫の新炊　蕉
千ゝ吗一ぢゝふさゝなう　坡
未進のゝもとてぬを安閑　蕉
傳へも知らせを嫁を連こまて　坡
屏風のうけはるる巣は盆　蕉
續猿簑
八九月ゝて雨ふる柳ゝれ　芭蕉
ゝれゝすの留月ゝ名　沾圃
沙弥ゝる馬ゝもこの乳ゝ絞ゝて　馬莧
内ハとさにく晩の振舞　里圃
さのゝうら日和ゝする方のを　沾

拘脊うれて肌をくふる　蕉
閑拍もとゝ〳〵へ風ふ吹れう　里
孫う孫ゟ祖父の借物　莧
服さ〳〵よりへて引しゟ孫刀　蕉
煤拭去ゆへいとゆ孫の後　沾
約束の小ゟ一さけ雲へ来て　莧
十星さうの余示出ゟり　里
紙の葉に小話握てれりゟ　沾
あゟ風うつふと門の出付　蕉
いつくへう後いはゟ紅揚望　里
やりと中ゟ出ル京の反連　莧
有ゟるおゟゟ死のたゟつゝ　蕉
又来よそゟへ和のとへに　沾
春を尽中ゟ蔵れ俳を夫　莧

下卒

伊勢の下向よへ何なりと通　里
長持に小拳の仲ゟ六しと　沾
くいゟゟと六のゟれゟ主ゟ　蕉
禅寺ゟ一日あゟふ砂付上　里
槻の角のとてぬ貫　莧
演出ゟのはに儀式ゟふ心　蕉
お出ぬ晩よいかくゟ内流　沾
方法よ俳茅元の打ゟひ　莧
雛の葉の名ゟさゟし　里
むとて来て栗ゟえ紙葉もむ唐　沾
俳伝はゟゟ賀ゟのゟ　蕉
削やうよ長刀坂の冬の風　里
ゟふゟに至りこゟれうれる　莧
行ゟて安理ゟ葉ゟゟ事ゟ　蕉

そつと火入ふおとして　薫　泊
花いとや殘らぬ三日の名ごり　見
散つゝらのはるかけろふの水　里

くれ過る柳のこはるもれ日
芝柳の陰ゝ去なくる沼干
るさつの中垣の栗つゝふるぬ漏
新ゝ似ぬ菊匂も出よ初風
上野にて
四つ五ゝの桜ハぬ花ゝんゝふ
本うられて茶摘もぼくや淋さ
うれ花やゝ〳〵ゝと柳の反こし

紫陽花や薮垣小庭ぬ匂ふ　芭蕉
ようれるあひよ　伽ろ茶　俵　子珊
朝日の朝のゝき愛ぬ声ゆて　移風
出雲の相もそろゝ新し　桃隣
かんしと有明ゝ月ゝ　八柔
指拙う行てゝ〳〵も又来ろ　蕉
伝ろくて伝ろくてゝ　珊
そゝしと吹風の音　風
美堂ゝ　隣
おさゝ新の身だ〳〵ふゝ　柔
高ひしゆろうと内の納りて　蕉
山のうゝさる下市の上　珊
草庵のたいてハ孫の気ゝつ　風
七日の有も未〳〵細ゝ新　隣

秋来ても畑の土はひからびて　桑
雲雀の羽の生へそろへ声　蕉
ゆるゆると足のゆくとる花菖　珊
ひらたい心のやあたちろう　風
正月のとろろうり親治の金雇　隣
洛たる俵とろろたる布　桑
豆の酒麻てうり酸のはつて　蕉
五ツうおれの降る女房　珊
此係も利上ケはうれを近し　風
まんまと今朝は鞆を奈良　隣
結構なとろれを汁ふ切入して　桑
見世より奥を家ハ引とを　蕉
ろをけて今年ひとろ豆は方　珊
ゆとろれもお松菊麦の迷耐　風

栗栗は蒸もうろと深ぶして　隣
岡ゝらまろるくなものゝ入　桑
いそうまろ一日にして供仕度　蕉
糞くむ匂ひ漣さろり　珊
今のろふまろるを後ろ時西　風
日雇の五器城鏡ふを近　桑
扈従流御茶屋の窓ちかぬて　隣
小糸城まろ花の山ろ花　華

酈懐帝
懐之君自之所代未熟ごを終ゝ
皇従すろ田氏こうう

藤の家待ふかろ家りこふ　桑蕉
牡丹ゆろれを絲む度　湯　十川
みゝうおも力いろ雨降りて　京華
塁ふ立て垂　琵琶と弾いた　左柵

雪より八重ふむ馬の冬ごもり　川
出てそゝやる夏山の　砧　蕉
吹わけを枝も紅さゝこの社　柵
いつも茶屋より見る僧の家　葉
大のみち歩まれぬほど肥て　青山
稲をる日伐借りふゝそやれ　川
義仏を費用寺れ夕住とめ　蕉
瀬のひゝさうの見る方代　山
生おうら翁は給よ他られて　諸
貧る歩来せはまつ寒しく　柵
順礼の帰りて様の通うう　川
見しうえよ住ゝ脇さし　蕉
見えんとふもる糸見の暗ゝう　山
れへいはよさる　　　　　葉

下ノ六十六

蓑ふる駒紋の宮茂意深り　蕉
もとおらへたる行器の絵　此筋
陽上りの浴衣干るゝ住　葉
窓の破まゝ入るゝ小風　柵
さんーさふをゝみ蕗せ八重も来す　筋
雪のまうれいに行時のやま　遊糸
萩畠年貢の柴に苅をへて　川
酒屋の門をたゝく方の夜　葉
人足の貫用引あゝこゞつゝみ　大舟
四をとゝれまてを釜をゝせうり　蕉
義と日ころおしひ一死ふ　糸
作り出をゝ西よさゝく隠れを　筋
隠分のこゝゝに矢竜を結ひて　柵
大ふかゝやきこゝ一の金物　舟

僊肉よう治川ちう紀浪音声　葉
唯しこそれて休む　苔　原川
武蔵いつよう　寒紀花のうけ　蕉
娃のおのこん白る　苗　代　糸
鄙懐帝

俳別

風流のまことに成時やおもきに　涼葉
旅のさらちふ卯の花の雪　芭蕉
西川よひ花丸釜の頃さて　青山
門遠へさこる　磬　者に蒸掛さ　魯良
方のおいこん初ぬたも静こ　濁子
白紀西瓜も今ハ涼しーお　嵐蘭
庫裡焼のま成未なる盆中　岱水
ぬるこ一つとのそむ六　天　曲翠

下ノ六十七

三ツ屋よりうくもきこむ雲　嵐雪
んもあるを仮名よ名を出　葉
り物を色さく新成ひ合　蕉
木笠とちうハ不純をにる　如誰
入新も細を紀言雅の朝芽　良
悟と芋こてや寒紀人　山
陣よ隣ハ白成掘出ーぬ　翠
小鶴の文成遠る村し　子
この花よ列宮殿やそめけん　蘭
寺のくれ末成おこん雪水　岱
入物も田螺よ似せて井紀　葉
住るをすけハこ食成花　雪
長うぬ髪人冬の煮り西　山
まこ年くれて居名紀　蕉

大捕をうち疫ぬ抜ぬ蓑にさ[illegible]子

蕎麦の粥ふる人の目に振る蘭

ふるさとあるは紙いこいて捨ぬらん雪

おとけさ面ハ名のそよさき葉

秀ぞふる風吕ふ付る伊勢紙作岱

先つ日和こうぬ秋の夕蓑良

排足世の蓑をへへんもる後の方蕉

稲荷つまてふ小角柔迷山

狗の庭房とけうえ雄の童雪

雁永の岩よ移るえ鈴蘭

引渡をうに中りと屋まれて葉

機嗅恵しに酒ぞられ久り岱

やよや待て荷きて送る花蓑子

巣をうへ待るの人よ帰さる良

[illegible]

小文庫

俳別

我麦いわさとそくめ首逢却　山店

まくお牧原の麦くるうえ　芭蕉

馬的のるて淋しき牧の野ふ、

四五千石の松のたてやま　店

方しへ医者弦引とる蓑笠、

をくりの他伝たもるへえ　蕉

多るのころうら寄れ蓑法、

ほしふるものよ義弦やらる　店

蓑生に意弦やらたる男風俗　蕉

湿のふそ忘のり西に南乳　店

丹波うく伝ともふくて弓く馬　蕉

鼠雪ふまつれと利上さえぬ　店

雪を出て土器うつさと迎ふし　蕉
ねる糸中ふかるそさえ々ら　店
非呂のひいつるしとて坊法師　蕉
紫ゑこの中んて乱ゝ咲くふる　店
奥の院をりしをさと　般　蕉
今朝うゝいれ雪の鳴く　店
美の日に産屋の伽のつくりと　ゝ
かるしや湯浸食らん　蕉
いそうゝいれ股を絞る　店
因ならもとうに憂ふる　蕉
ゑゝいる擂こやゝ居られて　店
俳の木地をけゝむ糸たて　蕉
ころしと臼挽出せいはとゝん　店
そゝろに美のも由る井　掾　蕉

羽二重の赤ゝるまそれ起ふりい　店
若いけゝゝ非せゝ　すゝ　蕉
新ゝまゝと溢ゝれゝ今病労　店
畠いあれて山久寄のゝれ　蕉
日光へたんゝゝを秋のゝろ　店
ゝれゝたの山才の　一本　蕉
ゆゝ風ゝ蒲生の家も放れゝ　ゝ
物ゝせそやとさゝゝ工人用　店
花のいる中ゝ拙山とゝゝ　ゝ
蒸芋ゝ黒　谷のもち　蕉

ひとゝゝ山をひゝ深川の屋敷
たちいつゝゝて

雪中庵ゝ志ゝ　嵐雪

[illegible]

五月雨よ隠の陰家を留る　利牛

[illegible]

刈こうー麦の有も宿の内　野坡

麦畑や出ぬけてふは麦の中　岱水

浦うせやもの[illegible]うる蛍のうれと[illegible]

武府をおて故ひよ[illegible]

川[illegible]

麦の穂をたうりにつむる和

[illegible]

[illegible]田塚本氏[illegible]

五月雨の[illegible]

[illegible]有[illegible]由[illegible]出て未[illegible]也

[illegible]

夏日記

[illegible]

水[illegible]と人のいへ[illegible]や伝屋泊り　芭蕉

苗の[illegible]をふへなけ　巴　露川

朝日よむ[illegible]合羽を吹れて　素覧

[illegible]の内へ[illegible]る生もの　雀

[illegible]よ暗[illegible]の秋　川

[illegible]て[illegible]る[illegible]の[illegible]　覧

耕作の[illegible]城[illegible]しる初の[illegible]　蕉

至[illegible]あちふさ信濃国通　川

風[illegible]の[illegible]ふ[illegible]ぐさ[illegible]紀[illegible]　覧

[illegible]の[illegible]る日城出[illegible]ふ[illegible]り　蕉

[illegible]の[illegible]の[illegible]蛇の足　川

蘭城荷あけて門よひろ[illegible]　覧

さて丹下戸いとの中に[illegible]川
達者自慢の[illegible]覽
金割り一世の時の[illegible]考
[illegible]小本瓜の[illegible]次
[illegible]の[illegible]やたらに[illegible]丈
三俵つけて馬の[illegible]青川
それしに男女も[illegible]覽
[illegible]ぬ[illegible]
有時[illegible]百姓もかい[illegible]秋の[illegible]考
[illegible]もふ[illegible]次
[illegible]拔[illegible]拔[illegible]尊
走

[illegible]水の[illegible]居[illegible]
[illegible]さ[illegible]国[illegible]

[illegible]蕉
[illegible]孫の宮の[illegible]有川
[illegible]覽
[illegible]の[illegible]蕉
[illegible]花[illegible]腰[illegible]川
[illegible]畑覽
山[illegible]林の御[illegible]支考
[illegible]の自慢[illegible]左次
[illegible]盃の[illegible]巴丈
[illegible]瓜[illegible]川
三瓜の[illegible]佛[illegible]覽
[illegible]考
[illegible]次
[illegible]丈

砂川集

蓋柿舎に異

年流を村のさとに五月雨　諷竹

青苔ふかき切株の花　去来

一枝のむしろに豆あおし合て　芭蕉

柄もこしもたき服指　惟然

月新し芭の海亀の下うく　丈州

堤下りてい田の中の道　文考

涼しいふよ井戸の間を来

住所い月ゆ十五夜あり　竹

秋もやゝ今朝うゝ見給へ　然

雁うり鶏のこやうまてゆ　野明

拖迫て松ふひろれ有ゆ　考

ちゝ人をとゝ奥ゝとれもり　蕉

下ノ巻

雨乞の志ふり蛇ゝ行ゝ巡て　呼

行芋ゝゝ掃箒のうゝ　然

極楽てゝ花居不ぬ花のもち　竹

客さゝなゝ世経ゝ　来

道もふゝ畑の祖の花さかり　州

寸屋弦発のむゝるゆの　考

（十三州舟の渡）

蘭秋の出水ゝ下るうを霞　明

捨ゝのぼりて流る白ゝ　然

賣ゝ寄る筍抵てゝむゝ　者

案内の雨のゝいゝゝ　竹

この頃の上下の瓦の戻ゝ　来

勝ゝ抜さを有の音　蕉

菓ふゝ水夕瓜の形ゝゝて　然

ちゝゝゝ多のわゝ初ゝ　明

朝の方起しくたること五六ふく　行
ふるふるしまの長岐しめかり　来
蓬生のおもしろけつく伏見拍　蕉
かけんをぜしる泥渡の捕　然
出来て来る者の水深れに入て　明
行秋けりしく見ふ蓑　結　竹
改あてを尾張の宿城を出せろう　来
肥後の相場城又出てしん　蕉
数口も花見の連さそはれて　然
日くせまるうしまの風　明
市の菴
柳骨折片蔭はとし紅葉風　芭蕉
雪引修うる道中の稈　洒堂
野崖里ふる出ろ花て　去来

源うけ法をる花石この花　支考
方行るいろふく玉紅の　蕉　文仲
小鍋うれて砂ま照り付　素牛
上状見てそ〻伏後〻蓑　堂
ま捕を入る〻法通りう紙　蕉
瘧ま食いいつものそ〻れて　来
大ユの水ヲ弱城備る　考
井戸桶の水汲うる庫裡の先　牛
たようを待て砂涯利蓑　堂
ふう牛もめをる雨のさと　草
恵〻止ま志くるせんそく　来
歩艶を焼し給と両方ま　堂
思ふてうと探の本の森　牛
方花ま小き門と出つ入り　蕉

巣おろを四の叟る掃叔堂
傷芝に眠まつをたる医者の供華
我菓の香のほつとしてある蕉
庁にの個りをうりと指出して堂
迎をたのむ日のあれ掃来
うを雪の一をん蹴ふ淡考
所前いちんと次の田楽蕉
遥こゝの細を亂のなつた堂
隣の所あしなくなり牛
菓孔の跡て経慣む遥公物来
を掛捨ておろに牛の考
川に流うて京をあるはる蕉
岩よのせたる田上の客竹
西方もいつやれい淋しい北日堂

下ノ上ノ

雑清よ来ゝそその名代来
咲ゝれよ行つゝおをゝな雑牛
彼家我ゝうけてお使導く草
ゝ粉をぬ老ゝ下求良老
役者をやうの哀の薫来
礪波山集
学ふ朝日さたゝ井桔子 浪化
孔者ゝうゝらくまれ新さ去来
やふ人の土産仏会ふこゝらて、
又時のゝよわゝゝる空化
巨燵切ゝをさも近義方、
ひろひふ我丸にの借る来
猫人の銭と買ゝ田舎遥、
かひこの臭さ六角の来化

京たる個城一とへ引ちらし、
小屋ゑふらふ塚の裏町　来
云々のちも〳〵と起る流通す、
梅咲そりて色花こやし〳〵を　化
年中城松の内ゝ新煙くひ、
伊勢の帆日いそう〳〵たる　来
上紺の未綿合羽に傘さして、
浸屋の手洗い八つ下りふり　化
名月のもやゝ〳〵ふかゝ〳〵あひ、
一分でもふこと梨ゑし切物　芭蕉
玉祭りの伝濃ゑ好る秋の風、
不見ふ寺ゑ陸ゑ持とる　夾
右のゑれふるひ沢ゑ陸うく、
恋うけて手る相役の　化

此右城とめひて通る鮎の鮓、
青田うゑ〳〵ひさて夕ゑのうせ　蕉
平ゑふる石城ゑる山水場、
給仕とさて馬まう食ゑ　来
方〳〵紅ゑの塔柄と星てゑ、
聖灵棚ハよのほと寂　屈　化
去りふ百ゑ涌ゑ出ると恋せて、
まてくゑからうゑ去年の傳ゑ　来
急宮といへい盗もゆ〳〵ゑう　化
ゑいと新ゑにむ〳〵接ゑ　蕉
養ゑたる松ゑ花の咲ゑはれ　来
四五人通ゑ信ゑ宗ゑ　化
薪ゑ町のゑゑもの磬ゑ能　蕉
いつも芸ゑゑ紅世の中　来

朝露によごれて涼し瓜の泥
六月や峰に雲置あらし山
清滝や波にちりこむ青松葉

鳥之道

木節庵にて

秋ちかきこゝろの寄や四畳半　芭蕉
しどろにふせる撫子の露　木節
月残る夜ぶりの火影打消て　惟然
起るゝと澤まで下る谷鶯　支考
隣まする九重そ北の玉垣　節
手もひらふいて綿細てとる　蕉
夕飯を喰ひて懐の膳をまけ　考

何の箱ともしれぬ大きさ　然
高しで秋のかゝる空花さ　蕉
うちこし蚕のせくるひかう糸　節
佛壇の障子よ右のさかり　然
梁からうの落る秋風　考
八朔の礼いそこし仕舞たり　節
舟蔵の鯖の時分ころ多く　蕉
西東濱ハ地早ふみれ出る衣　考
拂寄りまとる遠看れ丼庵　然
結うけて細縄足らぬ花の垣　節
足袋ぬいで干汲ま陽炎　考
年礼よ吹き紀ねつ供させて　蕉
隠すたちを見ぬら雪ゝ　節
切様の上より志ら紀額つき　然

色とうさうとれく　蕉
は都は四面こ雨ぬる中に　考
井の根ぬけ　ものさうし　然
ちうしと糸への枇杷と芋の連　節
嫁と娘よりとるに秋こく　考
客いとれさむくこ紫の巨燵の宿　蕉
蓮とるとおさうるあさうるあり　節
餐結て番よ出る日の朝有教　然
木よ十ヲそうう挿ぬたしるむ　蕉
瀟洒を中稲仕あけて食案り　考
桶もからびもいたらしぬたが　然
投うちをそれまて描の迹あり紀　蕉
首よ物をうくよる掃除　与　考
義を見て案つこはしる裏れ山　然

汚くしの肥る赤土の岸　然

續猿蓑

夏の夜千鳥なきて明し冷しあ　芭蕉

蓮いとらうとと蓮の根を　曲翠

学ハいつその迹よ青沼入て　卧高

古紀華　紫よ反古れしの　惟然

方紀の雪もちうよるやれを　支考

赤ちくて残ぬる野るう紀　蕉

橋とうう場のかく迹ふしし　翠

山うくふよ名と出て出を　高

魚越ふる面捕ようさむ行漁　然

鳶て立夫とくくる賜り俳り　考

おのう車ぬうれ漬るく搖れ番　蕉

竹俳の紀よクはさく迹　翠

平畦よ菜植所之一たこ跡　考
秋風こたる門の居風吾　然
馬寄て旅ハひそむる方の新　高
尾張て付しもとの名にかる　蕉
解ぬのこゝろ此花のあゝふれて　翠
正方ゑの孫もことさを　高
玄風ふ普請のたりいさすゝ　然
投ゝ村へぬけるゝ道　考
食ゝぬ奪も暑もに利て　蕉
行その時ハ山伏よふる　翠
笹芭を接よ附たるとさを箱　高
厳こゝゝる和方歩くを糸　蕉
お寄と行先に立ッ矢木の町　考
除の日和よ雪の氣をひ　然

呑ゝろよとせぬ酒の引隔し　翠
芝ゝへの分城和へあつくる　高
身付しゝ箱来たる方の蓑　蕉
そろし歩りくゝ色の上籠　考
宏発注る四条の角の行京町　然
高瀬とあゝる表　芝　園　翠
今のゝふ注をゝゝゝ接の上　喜
大き松注のとんふ宮ゆゝ　然
さゝふる花るも暮れ出せて　考
腰うけつゝしゝ夜掛の下　高

芝芝ゝ庭よ松と接ること
孫しゝ参すゝ上社松の枝の　松
ひやしゝと塗をふゝゝ立郭

七夕や秋を定るけしの数　亀舎

家ハこれ拭ふ白髪のごとうまり
いぶつるや園のすゆく五位の声

壬生山家　翠草

つくつくぼうしもなく板の奉行　惟然

井のそつれと初あつしし吹　土芳

朝力よ弱さきへ尾をふりて　雪芝

をれいとろ孤屋腐くれ切　猿雖

大八の通ろうねるせゝ小路　芭蕉

所去の旅よ編笠も苔に　泉岳

漂ふうゝ水仙ひゝく川おもて　九節

鞦韆ゆ井をゆ孤ひどき老の

嫁入の来て張られ門まろ　芝

扶と笑屋を訪りて亜翠

一ゝゝみ色ゝ立ち方新然

孤弱るあり孤念の浦雖

大島のゝくゝうて四も畑ゝ蕉

蒼麦粉とふゝ惟然汗袋

立ふうゝみ出ておくゝ世は鶏雖

幾折まりて犯毋の法ゝ蕉

ゝ人丸よ花の本法の一かゝく芽

とこやゝ宝ゝ花まゝ風雖

桜花屋にゝ荷ゝ咲ハ出ゝ変芝

ふうひのゝゝ花よ浅蓼ゝ俤袋

冬ゝれの九年母おしむゝ蕉

たまりしゝれハ居風呂の湯芝

持徒の一句ふれたうゝ　翠
あたゝ法ゝつゝゝれつゝたゝ　芳
言のに入ゝゝれたる道具市　節
葉のはゝこゝろのぬゝ紙ふ茶瀧　然
ちゝうあれゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　雖
ともに年ゝゝるあゝふさゝの　扶
有明よ志はゝゝゝてゝ馬と雪　袋
雪時雨より顔痛やゝたり　節
引たゝて留ちふゝて来ゝ蕪門　芳
入とりたまゝうにゝて烟古井　芝
ゝゝゝとさせるに付る貝殻ら　雖
いとのゝゝさられはゝく朝風　然
さもゝとゝたの法る大ゝ生　翠
折にまゝる出ゝの弱　松　袋

猿雖亭　猿雖

はゝゝて来ハ海ゝ哩ゝゝ
雇のかゝらをあゝる霧の　徳　芭蕉
朝月表篤ふやゝやく遅待て　凱方
茶のゝゝたゝ暖屋のひま　望翠
かつたゝと拐をゝゝる雑水取　士芳
窮屋ゝゝゝ待ゝう　卓袋
燭屋のふされゝゝやゝて　蕉
名主と地下とゝこゝる刹　雖
幾仮と刻ても中の冷たさ　翠
れゝゝ鶴ゝ出ゝゝかゝ　芳
ゝれゝ扇の要仕ふらゝし　袋
湖水の面月はゝゝゝ　菩薩
服ゝゝの小屋の窓を拭ゝ　力

角力よ夏ていとゝもゝ隆し　雖
山伝いと伏村の一うま　え　蕨
くつ〳〵うゝ〳〵彩の陸の果　袋
焚さ〳〵て紫ゝうふり屋の花　芽
土うたこうたまえの風とち　蕨
坪ゝうの川除の石垣と上ケて　翠
月ふゝしに風ゝうあ〳〵　蕨
大名の供の長さの果もうた　力
むうれの凛のおゝる血れ道　雖
一升八代をもて来ぬ酒の新　蕉
たらひの庭ホ霧うとゝる　瑳
燈ま茎屋細立の扱いて　芽
融の寺の抱もとのを　力
ゝゝゝいとゝのぬホまて義ゝ　蕉

下ノ全

于かゝひらのゝ　ゑる三ゝ力　雖
神ま　和供と持て上ゝる　翠
志ゝゝく苔よ休ひ氏土　笹
衣芸て揺をるゝ清新ゝ　蕉
加ゝ〳〵ている寒のゝ八仏　芽
耳多姓成ゝうる戸に接ホ　雖
引義のゝろゝ雁れ六天　翠
大ゝうふ凡中裳あゝる花の張　力
茶の潤るのたるひ二力　蕨
残る扱ま拾芸て苔ゝる接ホ和　垂芝
鮮春ふゝうにえゝる滋　新　芭蕉
ゆ八力ま日ゝる接ホ実ま物て　土芽
ゝを材ゝま咲る鶏新　風来

身とそいひ二人つゝ五在原　玄虎
こふちうけ玉　玉の門かの　苔蘚
燥萱紅月利の内ま行住て　蕉
住りて考しくさ門の鶏口　芝
大木の梢ハ枝のちくむふり　麦
堅ま麦とし　てとうた俵拍　芳
山伏ま絶かつこ来て礼配る　蘇
一里りても花をとる　猿　虎
かけ茶の布袋の呉と方そして　芝
百の矣まこうしを　蕉
秋う世の雨かろしと川の上　芳
おり茶ハ私とゆう上るく　麦
矣俵山ハ鳥花の笑そ　虎
とても利ゆう麦の須　礼　蘇

七日の西ま朱たる　切目　猿
お花ま　ぬ　西の　　芝
のこれぬや余ふう　　麦
紫たく俵小　　芳
寒井の枝の節ま　　蕉
ちゝぬ山路とこ　　虎
言るゆう寺　　芝
そく花の俵ま　　蕉
ひけふをや方小　　芳
裝束のいとれと　　麦
おもひ切う流う　　虎
白ひとる紙ま　　蘇

花方の花うとゝ

[illegible]

斗後ゑ山[illegible]

[illegible]

山雀のことやうて[illegible]の稲　斗従

俳諧集

松茸やそらぬ[illegible]の[illegible]　蕉

秋の日和ハ[illegible]　文代

春の月行[illegible]の通と中[illegible]　支考

そとハうけて郷のうり家　雪芝

四五人てそ[illegible]　猿雖

いそうし[illegible]　望翠

今朝の雪[illegible]　惟然

下ノ巻

[illegible]風たくんて脇をさるうり　卓望

[illegible]上加茶のうつさい　代

[illegible]の[illegible]　考

[illegible]の[illegible]　芝

[illegible]八[illegible]の　雖

[illegible]　翠

三年立てと[illegible]　蕉

[illegible]人[illegible]　袋

[illegible]も果ぬ佛のうたく　萩

初雪の恒のふる井結[illegible]　鼠

通[illegible]ぬ月の[illegible]　代

[illegible]の[illegible]　袋

[illegible]　考

年切のザさい[illegible]角とへ　雖

居風呂の湯のうめ加げんなれ　子
二三年年切りたれハかゝるとこ　考
ろ宮の焼跡から〳〵番小屋　義
藤ふれて枯手たる竹の孫　雖
花ことゝ〳〵と附〳〵の仙　芝
味噌賣の宵寂しに名伝て　代
木綿袋盗よにとの上にり　袋
ゆゝ明よ年家の和と麿住　然
ゆゝ畑よ足さる蔦〳〵も　子
この秋八幡の脱とわつゝひて　義
伝と俗との発の釜ゆり　翌
呵るほどよう焚付ぬ竈の下　芝
芝切入て馬屋背ける　考
くゝさむと行但山のいとゝ　雖

芋の日向よ屋のきゝと　代

俳諧集

秋の扇ぬうち蔦〳〵ぬ嵯　芭蕉

なまりほとゝ蒲窓分窓　車庸

西の己二とれ三雁ゆて　洒堂

ひゝうゆる牛のゝく動く〳〵　游刀

場の名まんまゝ〳〵まゝ性者　調竹

小油紙出して蘇たゆ大　惟然

使やゆる変とゝ〳〵ことゝ　支考

ゝても医者のゝ蕉ゆゝ　蕉

拭ひと恵しの拉きゝ　庸

考て掃ゆる弁当の　挑堂

紀ゝ恵谷ゝ出て蕾ゆゝ　刀

すきゝゝゝくゝ飛ハゝゝゆん　考

蕉のとぬ板ハ石笑う百ゝ損　蛟
面手の方ゟ細ゝ川　為庸
大焼しゝ業師をかる雅う嶺　蕉
七種ゝをいよろつ惜かき　刀
えせ馬の蹄の蹄の苗ゝ苗ゝ堂
小屋形ゑゝ蛟金板の　春　蛟
密耕ゝ色
板風ゝ新酒をさゝんおそ郭　支考
方もゝふゝ石　垣の　上　猿雖
町の角追ゝ蕉の花ゝ　色蕉
きてい活衣の　猪を引もる　雪芝
世月ゝおはえを小ゝ引ゝ　惟然
此ゝうてはゝゝ活ゝ　皇袋
蕉相ふる茶張の風い切ゝ　望翠

家て天宗弦ゝ引ゝ　考
袁比を備ゝ侍の猪ゝ　雖
嘘花の中弦亟程ゝ引のけ　芝
仕合ゝ矣揺の糸ゝ　蕉
あゝけゝ鎌の猪れゝ　翠
せうゝ活ゝ羅ゝ　袋
大工家根屋の帰ゝ　然
用のある時いうけ巡義ゝ　考
雨の降る日の節句ゝ　芝
ゝハ墨弦亟ゝ　袋
親ゝ人字をゝて　考
為新ゝ又ゝ返す　翠
備りゝふゝんの跡の　雖
咲花ゝ毎年ゝ　然

陽炎うけてたゝなはれけく　袋
幸と猟のはしめは雉子うちて　芝
内侍の笛をたてるたのいろく　考
遥恒の門のこゝろ入りくさに　雖
一里の舟も脇のすきたる　翠
山ゝをふ蜜柑のうの黄にのりて　蕉
ちふれてかゝる留の嶋　考
毋才に離をて方のもれ淋し　芝
嵐の籠る巻葉の中　袋
傍柴の鬢を結ひあふ徽の雨　雖
さうふ出とにと酒ふ浮々り　芝
小倉とハむうひ合せの下紅葉　然
芝夏の風よ人死こうわろ　考
永奥を千日寺の粥喰ふて　蕉

下ノ八十八

歯うけ足弱の雪ふ埋れる　雖
やうしに今ハ海ちのあ留根　翠
加減のこゝろ入りくさに　蕉
微風をまこりて　考
とはれて生る彩のおけし　袋
新中ふの茶湯ちうと房の業　雖
何ハ沢水よ生のたやほく　芝
拓もせをふうるとちふ社楠の枝　袋
方えよいつも道俗ちうく　考
聲もゆうしとする秋の風　翠
淀の小家をとをくる雪　然
懐よりう出しを重ゝとけ状　袋
いそをの翁よ白を鶏者る　考
雪張の窓ふうめうく花の枝　雖

根蓋にさひる雪のふく　芝

切株や白髪ひろげる栗のいが

あらそ

菊の雫やふるよ古代佛達

ひいと吹風ゝ忘れ草　扶の庵

くらかり洞

菓の香よりかりかりる節句哉

菓よ出てゝとふる花方哉

こゝろ

舟　雲てゝ別かりる方えうれ　芭蕉

秋のあらしに奥ゝつれる　畦止

家のある野ハ刈孫花咲て　惟然

こゝもの辯よこのひ中服　洒堂

ゝろふ〳〵て土用とらしうね　支考

撥の枝をおろしるたらう　之道

溝川よりけおく冬紙引てる　青流

火のとほりたる亭ゝつれあけ　蕉

其使

所思

山道やゝ人ふしに秋の雲　芭蕉

洲の畠のまよかくろ葛　泥足

方ちゝむ蕎麦ゝ　支考

小さゝれと出て　汲　游刀

天竺お母織と入て芳梅　之道

酒て痛のとまう服くせ　車庸

かたにゝ節句ゝ花麦を殺う　洒堂

塀の蔦ひゝ赤き梅茨ら　畦止
線香もえのきこの伽よまる　惟然
夏比須の鎖の残る二方　亀掛
無の看とる我いねてゝ孔す　足
かくこそ草にさしる松風　蕉
ゝゝしとも冬の稲ハ立うれて　庸
地蔵の埋る秋ハうゝ〻ト　考
仕るのあさ多い茶にかくる湖の方　道
鹽鮑の私のゝゝと入り込　然
蕎麦の花よ幕の差引吹えて　止
出傳日も上よ医者のゝゝるのさ　蕉

旅懷

心秋中行てゝゝしゝたる

一丁裏

松風の彩ゝらゝて秋れぬ

茶の雲

園女亭

ちゝ茶の国ふゝえてゝゝる雲ふる　芭蕉
紅茶ふよゝゝとふゝて報方　園女
冷しと朝の汗をあゝけて　諷竹
行ゝもせとゝよ年ハゝれり　渭川
小襖よ座右の弦ハ嫌ひゝう　支考
ゝゝとをちゝて玉しの孫　惟然
めゝたゝる秤ふ小張たゝてゝる　洒堂
紬ふさくゝう親の名代　舎羅
垣越ゝたちゝゝとたゝの礼ゝて　何中

晉清の内いふ屋て大戎葵　蕉園
帰らぬよ極まる蛙の声を　園
酒買ふて候早稲の搗初　竹
うれしと方の出うる板の表　川
板引たる町角の秋　考
うれたやう浸うら通ろ伝ふ蛍　然
彼岸のぬくさうなれてかさうな　堂
青芝いねよもうそうふるの花　蕉
出代り時の去を歩たしふむ　中
通ひ法を撰ふふるねい送入　竹
去ろうにふふす奥の庵　挺川
あうしとうとうを今れ全の堂　堂
雪のくしのふよふる風囲　園
紫壹よ隣のふるも連ねせ　考

清秋は板の去くむふり　然
上下の搗れ後なる川の青　中
うふ田の中を雇れのさたく　蕉
小うくよ不ひを粧く新ふう　園
結の仕出しのくやう甲機　堂
方新しくく作を板の去さ　竹
枝去本を通の脈さし　中
此うしのうにふれも被のふらも　蕉
老のちうに姫はしこうり　り
條ちうる渦のいうれ張さ　考
去うぬ五うの後ごのされる　園
田のふの注連ふうて花蜜　堂
柳のうしふうのへり　然

人事や什屋このへる秋の庵
秋もなやこゝろつく雨に月の影　花屋のうしろ

旅まゝ病て夏ハ拾月をかけろる
　茅の病る弦まて活なる
　出る丹仲

糸まき捨こし長物のうやを死　去来

　病中

白粥のいのうをこゝろやを絶
　行徳

木拍のそゝゝかほをや鶏鳴
屋つゝをやからも水して秋来め　木節
起さろく声もうれ紅湯源郭　支考
秋雪よりそそ引人佐左吹　正秀

秋のろ寸九のゝちうやれのうせ　之道
味こゝ鴨のされ山伝をたひ　丈草
月ゝ中てえ寸ゝ月こゝ名の業　乙州
笑ろろに竹の林やゝゝさくい　惟然
笑丹ろ鶴を拍ろん時ろ寸　其角

　病中

うつくゝる業の下れをゝれ　丈草
ゝうゝ孔て次の月へ出たをゝ　支考

追加

翁脇句

○梅さく雪は今の色ぞうれ　胡蝶

一つのね覚はゆくゝゆく

○我さく〳〵軒さく枇杷の葉ぶかし　松風

見ようこく山茶の花

○月花を両のたもとの色ぶかし　露沾

蛙のこゑよ身に入る声

○猿衣よ苗に泣く山食もん　曾良

淺瀬の浪いとゞあやめわらすかな

○ほとゝぎすよ江の蛍鳴山の雪　會覺

秋の気りとこゝ三日月

○こゝせくや旅の我ちる草の畑　惟然

その葉に蛍見るとゝ人夕花

○秋のくれゆくえてのこゝろ　本因

萩よ森やうゝ萩よ森やうゝ

○芽出より二葉に気ある柿の実　文章

島のちりよかゝる卯の花

○いろ〳〵の名もゆかしき卯の花　珠碩

うたれて蝶の夜ぶかさめぬる

○夜叉ふあつまの路やゝ五三日　知足

見もてゝやすゝ宿の卯の花

○おゝくや雨ふかさの三枚の夏　雪芝

くふすゝとこゝろに居ぬ杜鵑

○芭蕉翁ふ其句ぞ鶯うゝ　李下

月ともゝゝち弦の月食

○富士みゆゝ世人西行ふ人秋風　雷板

こゝ世紙と答人風の破うさ

○花の咲多ゆらそのうれ　勝延
枝うしほうこ條のくつをれ
○ゆのさくてゝ昔拾ひん本ふれ　啓山
爲よ　おの　　紀　十一
○やうこうに樊よ　ふ　ふ　能美　露川
田植ゝくもふ　條の　朝　紀
○我もふ　の　ふ　ふ　雅良
菜の湯よのゝ雪れひよ
○　　き　ね　ば　ば　せ　如行
古人ゝやうの枝のゝ
菜稚子　む　の　や　夕　涼　豊
ゆ　ゆ　ち　れ　の　花
○　菜の　も　や　大　根　許六
　　る　松　菜　の　條

○芙風や麦の中ゆくあつのおと　本朝
かけろふいさむ花のいと　口
○　ま　て　せ　る　田植唄　巳百
　あ　ん　ん　不　破の立方雨
○れ　ん　も　ふ　て　ま　木の梅松　露川
小春よ首のうゝくゝのむ
○時雨　や　花　ま　ま　ら　挑　生　園女
宿ふ　ま　ま　ま　ま　ら　ま　ま　ま　ま

。梅たえて日永し　橘今三日　湖春

朱のこゑ　の　素　つ　く　蕉

巣の中ふ燕のこはの並いゐて

。雨くれて栗の花さく　枝えぶり　桃雪

いつ〳〵のそよに鳴る蟬　等躬

夕鉤うへ物ら　面よ方出て

。蕎やく　枝ぬふらひ　ふ草　等躬

市のこのしくものえたる　刈布　胄良

月表ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

。長示　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　利牛

うちく　しゃく　紙の　利ら　岱水

蓋よれつ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

。花のかけ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　荷兮

和て中掃ん屋のけ　く　ち　接

七夕の八日いも　く　ゝ　く　ゝ

。年ゝすれ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　洒堂

孫よのせ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

青の方　く　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　素堂

。松枝よすくひあけ　る　矣　去来

徒れ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　許六

ひと　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

。ま　ち　や　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　一　流

二人　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　凡

裁物の麻のそ　れ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

さらけこそ
もしと名花の数や系図山　桃青
肌きよしとてもり気　秋る　立圃
秋の系のそれ匂ひ麝香丶
ほくろく咲たる色紙　青
かくはう定の入る高殿　舟圃
久人も一日　輝の数く　推青
宿あうと五重往出る家童子　圃
老いふるし十会とやの　青
水仙のさうとこそ神去方　圃
松統ゆうき常盤ゆうり　青
登られぬ大内山の后の　孫圃
ふるらしし郭丶　丶　青
ゆうこりよ虎出くる川浚　圃

下ノ巻四

然人てさ一西りい　こう　青
秋ゆてい畑よ他ろしろ茄子　圃
花丈とはして星系　青
傾城と横の中うう独の方　圃
狐の歩りく足もも根丶
奥篭寺と云ハを名も醒　青
伺太賣ゆて雪る白　雨圃
松袋の紅花に独たるそれ　青
沙石を漬てなを不可思議　圃
精進とうい逆こ仕様も　青
都をゆてそる江戸の　圃
三ッ踊くい老の姿も志賀ゑ助　青
ゆうけしと戸を却く風呂　圃
布袋こそ弥勒其の化身之　青

麗のうろこい三十六負圃
仙人よ茶ゐる事もうれ秋の月　青
その糸しいと紅木綿苟圃
ひらこの花のこゝろをもう掘わけ
山川をえとらえ紅人の夏人　青
みちのくのよりの石もうるあれ圃
かく抜し世を誰いろ人亥　青
花も名ふるとふ加茂を歩反圃
龍そし先ちう言砂の松筆

松堤獨吟

松のうれ竹屋足ふ来る序に
羽子の涙を知てり懸　義

九巾日のちうしようつうろへて
月行うれい袴よ傳たう
磴い唯あるすれ叶紅葉
世とて楽山子を居し実守
ころしもや庭の陽めるくあり塔
霜ふうけ出の後ふうを之
一備ちうこいふのらは森の中
との町しくて清るはたうを
そしよ元のい、弟の時雨
名もおきい川と本萱流れて
うれて接をと麻ふと厂の声
月よ思ひといとへ面ふ
かくかてのぬい君のれ雨ちう
仏の水よろくく茅　垢

花あれい狭き浅茅の住所
蝶舞へとてう所狭き
陽炎の移ふなを忘れ難き
化粧まもなれいまをもりも
薄いこぬい住まるひ懐を
文を有世まひをふとふし
うきをとて対の勢に交れて
ふりし心を返下を　児
麻呂ら何やら淋し宮れ方
紀氏の独まは住い　稲生
馬場殿の本樣あれ小受績
桂皮を積まるかしへ私に
朝もうひ紀貫之三すりて
顔一行り杉弦をう

下ノ巻大

寄り、そのはまくて長崎
屋のお後い賦をかなを
氏の弱おれるかけふうう
吹雪の袖をふるくをを
松井の冥加を買人々の市
暦巻たるあうつきれ　霜